

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊 もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2013年5月31日初版

第9号 <http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：
迷う事のない迷路を
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



『週刊新潮』に安部ねりさんがエピソード語る

さる5月8日発売の『週刊新潮』5月16日号に、「安部公房没後20周年 一人娘が語る父の奇矯な悪戯」という記事が掲載され、多くのエピソードが紹介されました。内容は本号の記事「興味尽きない公房さんのエピソード」(hirokd267)をご参照下さい。

佐藤正文氏が講師を務めた「安部公房のシステムによる演劇ワークショップ」が開催されました

5月3日(金・祝)～5日(日)に、セツ寺共同スタジオにおいて、元安部公房スタジオの佐藤正文氏によるワークショップが行われました。安部公房システムに存在する「ニュートラル」「生理的アプローチ」などのキーワードを手がかりに、《存在》の演技を体験し、真の演技術に触れていただくというのが狙いとのこと。毎年開催されているそうなので、来年の開催にも注目です。<http://soushinkikan.org/diarypro/index.cgi?no=872>

笛井事務所による戯曲『棒になった男』の稽古場公開 (Work in progress)

笛井事務所の次回作は、『棒になった男』です。プロデューサーの奥村さんの言葉によれば、「Work in progress」という方式をとるとのことです。日本語にすると「稽古場公開」といったところでしょうか。

「稽古の段階から、観客にみてもらい、それによって、具体的には観客の方の視点、或いはこの作品のファンの方の反応を幕が開く前に知る事でより良い作品になるであろうという期待を込めた試み」とのことです。

また、役者だけの閉じこもった世界で稽古を重ねるよりも有意義な稽古を展開するために稽古後には皆さんのご意見を伺える交流会のような時間を設けたいと思っているとのこと。

芝居ができる過程を見てみたいという方は是非ご参加下さい。お問い合わせは、奥村さん宛に、fey.office@gmail.comまで。

奥村さん曰く、芝居は役者や演出家だけが創るものではなく、お客様がいらしてくだってようやく完成するものなので、是非一つの芝居の成長過程を見守って頂ければと思いますとのこと。

また同時に、笛井事務所による『友達』のNY公演も実現の射程に入ってきたようです。詳細は、また具体的になってからお伝え致します。

木村陽子『安部公房とはだれか』が発行されました

5月15日付けで『安部公房とはだれか』木村陽子／笠間書院／本体1700円 が発行されました。本号「私の本棚より」の新刊書評で取り上げています。

『箱男』読書会が開かれました

5月19日（日）新宿で『箱男』読書会が開かれました。7名の参加者があったそうです。この会の報告は清末浩平さんにより本号に掲載しています。

日本近代文学会で『内なる境界』の発表

5月26日（日）日本近代文学会が法政大学で開かれ、若手ワークショップで「都市のアナキズムー安部公房『内なる境界』の脱構築的批評ー」が大場健司さんによって発表されました。要旨は次にあります。<http://amjls.web.fc2.com/PDF2013/kaihou-118/wakate.pdf>

日本文化創造学会で田中裕之先生の講演がありました

5月29日、日本文化創造学会（於梅花女子大学）で、田中裕之先生の「『箱男』と現代社会」という講演がありました。

小林正樹監督『壁あつき部屋』が北米版DVD BOXで発売

4月16日、安部公房がシナリオを担当した小林正樹監督『壁あつき部屋』が入ったDVD BOX『Eclipse Series 38: Masaki Kobayashi Against the System』（Criterion）が発売されました。リージョン1の再生プレイヤーが必要です。<http://www.criterion.com/boxsets/952-eclipse-series-38-masaki-kobayashi-against-the-system>

目次

1. 表紙ニュース...page 1
2. 目次...page 3
3. 「所有」について一坂口恭平『独立国家のつくりかた』：
番場寛...page 4
4. 『終りし道の標べに』をめぐる詩とエッセイ：
花谷紫月...page7
5. 現実生活にあらわれる安部公房現象3：滝口健一郎...page 13
6. ドナルド・キーン先生にお会いする：水島英己...page 16
7. 5月19日『箱男』読書会レポート：清末浩平...page 18
8. 『人間そっくり』小論：wlallen ...page 21
9. 興味尽きない公房さんのエピソード：hirokd267...page 24
10. 私の本棚より：
 - (1) 『郷土誌あさひかわ』：wlallen...page28
 - (2) 『思想の不良たち』：清末浩平...page 29
 - (3) 『安部公房とはだれか』：岡田裕志...page 30
 - (4) 『砂の女』：岩田英哉...page 32
11. 安部公房の空間と時間(2)：OKADA HIROSHI...page 34
12. 安部公房の変形能力7：リルケ4：岩田英哉...page 36
13. もぐら感覚11：自走するベッド：タクランケ...page 47
14. 安部公房と東鷹栖3：資料・村史：森田庄一...page 53
15. 読者からの感想...page 56
16. 合評会...page 59
17. 本誌の主な献呈送付先...page 59
18. 編集方針...page 59
19. バックナンバー...page 59
20. 編集者短信...page 60
21. 編集後記...last page
22. 次号予告... last page

「所有」について（2）—坂口恭平『独立国家の つくりかた』を読んで『箱男』を思い出す—

大谷大学教授 番場 寛

[いつも「もぐら通信」に深いご理解をいただいている番場寛先生の大学のブログを拝見していましたところ、興味深い記事がありました。「これはぼくにとっては「箱男論」でもあると思っております。」と仰っているのを聞き、本紙への転載をお願いしましたところ、快くご承諾を得ましたのでここに紹介します。『箱男』の現在形あるいは未来形として、広がりのある方向が示されています。次号にこの続編となる文を予定しています。編集部]

祇園祭のさなか、田舎で過ごし戻ってきた。長い車中と実家で坂口恭平の『独立国家のつくりかた』（講談社現代新書2012/5/18）を読んでいた。車窓からは畑や森や空き地に様々な家が点在しているのが見える。あんなところにも人が住んでいる。あそこの生活はどんなだろうと思った。

この本を読んで感じたのは、ちょうど「理性をも含むあらゆる拘束からの全面的な解放」を唱えた芸術運動のシュールレアリスムやJ=P. サルトルの「アンガージュマンengagement（現実参加）の文学」という概念に初めて触れたときに似た興奮であった。

それは、シュールレアリスムや「アンガージュマンの文学」は、文学や芸術とは絵空事の世界ではなく、この生きている現実と直結しており、ひょっとして現実をも動かせるかもしれないと思わせるに十分な力を持っているものだという考えを与えてくれたからだ。

だが両運動とも、多くの人々の思考に影響を与えたが、政治との葛藤において現実の人の生活に有効に作用することはなかったようだ。ところがこの本の著者のすごいところは確実に現実において銀座4丁目の「誰のものでもない土地」に政府を建ててしまったことだ。そして現実において福島の子供たちを無料で長期休み期間に一時避難させることを実行し、しかもそれが自治体をも動かしていることに驚く。

あまりに豊かな発想と実行力に満ちたこの本は要約するのが愚かに思える。是非読んで欲しいと思う。冒頭に掲げられている坂口が子どもの時から抱えている質問は、おそらく誰でもが抱いていた筈だが、大人になると忘れるというより問うことさえ自らに禁じてしまうような問いである。その中でも最大のものは「人は金がないと生きのびることができないというのは本当なのか」と「誰のものでもない筈の土地がなぜ所有されており、所有してない者は家賃を払い続けなくてはいけないのか」というものである。

彼がそうした疑問を持ち続け、それに基づいて次々と行動を広げているきっかけになったのは、かれが会った俗にいうホームレスの人たちがゴミと言われているものを使って自分で家を建て、都会の「資源」を利用して殆ど無料で生活している現実を目にしたことだ。

この部分を読んで即座に思い出したのは安部公房の小説『箱男』である。段ボールを被り移動式の住居とする主人公を設定し、それにより国家とは何かという問題へと掘り下げた小説であったが、まるでその小説が予告していたかのように、以後東京のあちこちで、段ボールで生活する人たちが問題になり、都心からは追いやられていると思っていた。しかし実際は誰のものでもない土地を中心に日本のあちこちで不動産ではない移動式の住まいを実際に建て、生活しているひとたちのことがこの本に書かれていて驚かされる。

ずっと昔にある学生が、「これイッセイミヤケがデザインしたホームレスのための服なんです」と着ているつなぎの服を見せてくれたことがある。本当に三宅がデザインしたのかどうか確かめたことはないが、美術館でも展示されているのを見た記憶がある。寒さや痛さから身を守り、地球のどこでもそのまま寝ることができる服があるとしたならどんなに素敵だろうとそのとき思ったが、坂口が実際に造ったモバイルハウスはその夢を叶えてくれるものだ。

しかしこの本の著者は既存の国家や資本主義社会を破壊しようとしているのではなく、現実の社会を単一のものと考えるのではなく、いくつもの「レイヤー（層）」から成り立っているものとみなすことにより、より自由な人間関係を結び「交易」を行うことを可能にしようとするのだ。そうした人の顔の

見える交流によって成り立つ経済活動を、資本主義経済に対して「態度経済」と名づける。そうした活動を彼は「芸術」とも名づける。

こうした活動は寺山修司が行っていたことにも似ているかもしれない。発想を転換すること、かれが突然誰かのアパートのドアを俳優にノックさせたり、街頭で演劇をしたりしたのは、日常は確固としたものではなく、それは想像力によって変えることができるということを示したかったからだ。

さらに坂口が感動させるのは、彼は躁鬱病者であり、鬱のときには強烈な自殺願望にとらわれ、それに打ち勝つため必死で考えるということが告白されているからだ。これを読めば似た病を持つ多くの人も勇気づけられることだろう。

この本を読んでわいた疑問とは、かれが既存のこの資本主義社会と、子供の頃の間いを忘れたふりをして動いている社会を「無意識的社会」「匿名の社会」と読んでいたことだ。この本と似たテーマを小説に書いた『箱男』では、段ボールを被って個人の身元が消える状態を「匿名への夢」と語っていた。安部公房自身も逆説的にそうした社会を批判していたのだろうか？

この本を読むと確かに元気が出るのだが、今の自分に何ができるだろうかと考えるとおぼつかなくなる。ふとイスラエルのダンスメソッドである「ガガピープル」のワークショップに参加したときに指導者から言われた言葉を思い出した。「あなた方は踊っていないときでも、たとえば電車を待っているときでもこの時の身体を思い出すことができます。そうした心の状態になったときあなたはすでにダンサーなのです」。

動かしようがないほど堅固で、絶望的に見えるこの世界も、考えぬいた果てに生まれる想像力で見方を変えれば、違った展望が開けるのではないか？ そんな希望をこの本は与えてくれる。彼に考えてもらいたいというより自分で考えたいのは、このブログでもたびたび書いてきた、恋愛における「所有」のことだ。否定すべきものと思いつつも困難な「所有」という欲望の否定を恋愛や結婚にまでも広げたならこの社会はどんな社会に変わるのだろうか？（2012年7月17日。番場 寛）

『終りし道の標べに』をめぐる詩とエッセイ

花谷紫月（はなやしづき）

□■□■□ はじめまして

ひと月ほど前、こちら（もぐら通信）にも寄稿されている清末浩平さんと交流を持つ機会に恵まれました。そのときの『終りし道の標べに』をめぐりいくらかのやりとりに触発されて、今回の詩とエッセイを仕上げました。

わたしはいまブログ (<http://d.hatena.ne.jp/flowervalley/>) で『デンドロカカリヤ』と初期著作群のシリーズを書いています。『終りし道の標べに』はそのリストから外してしまったので（でも、いくらか取り入れるかも知れませんが）、それに関係した「断片」は行き場を失っていました。今回、その発表の場が与えられたことをうれしく思います（声をかけてくださった「もぐら通信」編集部の皆さまに感謝いたします）。

□■□■□ 詩

記念碑は建たなかった

いまも

眼差しがここにあることを 青年は不思議に思った
誰かのころのように 荒野の果てでつむじ風が舞っていた
時の境界線上に立って 待っていた 夢だったのかも知れない
大地は遠いものを泣くように いつか歌いはじめるのだろうか？

（大地よ あなたが望まれたのは眼に見えぬものに姿をかえて
わたくしたちの内部でよみがえることではなかったか）

そこには 名前を持たない花たちの無と邂逅があるはずだ
記念碑は建ったのか？ 記念碑は建たなかった

やがて
言葉たちは砂塵に切り刻まれて おおらかに消えてゆくだろう
なにかを見つけるよりはやく 夢は陽光に打ち砕かれるだろう
記念碑は建ったのか？ 記念碑は建たなかった

□■□■□ 詩作メモ

第1連の「遠いものを泣く」は、『安部公房全集』〈1〉から、詩「さうだ、町も村も」より「友よ、ぼくは遠いものを泣いた／ぼくの墓の上で」を組み込んだものです。第2連の「大地よ、あなたが〜」はリルケ『ドゥイノの悲歌』（第9の悲歌）からです。

第3連1行目は『終りし道の標べに』で当初予定されていて、でも実際には書かれることのなかった（と思われる）「第四章 大地の歌」へのオマージュです（「第四章 大地の歌」はエッセイのパートで取り上げます）。

□■□■□ 継続されている行為についての断章

わたしはこの頃、『終りし道の標べに』はとても怖い作品ではないかと思うようになりました（皆さまは、そのようなこと思われませんか？）。この作品（冬樹社版）の題辞は

記念碑を建てよう。
何度でも、繰り返し、
故郷の友を殺しつづけるために……。

となっています。ここで、次のように質問してみましよう。そのとき記念碑は建ったのか？

記念碑は建ったのか？ わたしは記念碑は建たなかったと思います。なぜか。「殺しつづける」は、完了されることなく継続されている行為の表現だから、記念碑は建たなかった。わたしはそのように考えています（1. 記念碑を建てよう → 2. 記念碑を建てることによって殺す行為が遂行される → 3. でも殺せていないので完結しない → 1.に戻る、みたいなことです…）。

記念碑によって死者に永遠の眠りが授けられ、あるいは死者の意味（物語）が碑文によって完結し、そうすることで、こころがその死を受け入れ、こころのなかの死者とお別れが出来たのなら、殺しつづける必要はないと思うのですが、どうでしょうか……

（安部公房は談話「裏からみたユートピア」で『密会』の結末「何度も確実に死につづける」について、「死につづけることは、死なないことだから……」と語っています。それを題辞の「殺しつづける」にあてはめると、殺しつづけることは、殺せないことだから…… ということになります）

「墓と手を結んだ誕生の事を書かねばならぬ」（真善美社版より）安部公房はこの作品を死の側から掘りすすめて、どこにゆこうとしていたのでしょうか。この作品で繰り返される「斯く在る」が、わたしには〈死者〉にむかって語りかけられた言葉のようにも、死者よ、斯く在れ…… というふうにも聞こえます（死者は非存在なので斯く在ることは出来ないのですが…）。

『終りし道の標べに』（真善美社版）は戦後の混乱のなかで病死した友人、金山時夫氏の名前から始まります。「亡き友金山時夫に」これは当時の安部公房の正直な心情だったのでしょうか。実存を戦後の出発点とした安部公房らしい（自分らしい）別れ（友人の死を受け入れ、死者を永遠へと埋葬しようとする行為）のひとつのあり方として、小説という形式が選ばれたのかも知れません。

高谷治宛書簡で、安部公房はこの作品の初期のアイデア（着想）と思われるものを、こんなふうに語っています（『安部公房全集』（29）補遺より）。

「今の計画としては、金山の伝記を書き度いと思ってゐる。これは容易なこ

とではない。死であってはならないし、伝説であってはならない。やはり、悩み、生き、そして最後に、存在に対決する為に、永遠の孤独に消えて行って、人知れず夜の中に潜入して、悲しみでもない悦びでもない歌を信じながら死んでいった一人の友を、ここで再び永遠に生かさねばならないのだとしたら……」 (1946. 11. 5)

それでも、と思います…… 安部公房はすでに去ってしまったのに、残された作品のなかではいまでも「故郷の友を殺しつづける」行為（オリジナルな告別の行為、あるいは物語世界を死者と共に旅する行為）が継続されている。わたしには、それはなにか怖ろしいことのようにも思われます。安部公房もそれが分かっている、後年の改稿で「金山時夫」の名前を削り「友」に置き換えたのでしょうか……

記念碑は建ったのか？ 記念碑は建たなかった。

『安部公房全集』〈1〉の「作品ノート」をみると、この作品が当初4つの章から構想されていたことが分かります（直筆の「第一のノート」全目次より）。

- 第一章 （粘土塀）
- 第二章 （阿片）
- 第三章 （異端者）
- 第四章 （大地の歌）

では、実際に執筆された作品はどのようなものだったのでしょうか。その構成をみると次のようになっています（真善美社版より）。

- 第一のノート 終りし道の標べに
- 第二のノート 書かれざる言葉
- 第三のノート 知られざる神
- 十三枚の紙に書かれた追録

この事実を知って、わたしはつぎのように思いました。第四章「大地の歌」に相当する部分はどこにいった？ と…… 当初予定されていた、いくらか

マンチックな言葉の響きを持つ「大地の歌」は、どこに消えてしまったの？と。わたしにはいくらかお節介なところがありますから、あの書かれなかった第四章こそ、高谷治宛書簡で語られた「悲しみでもない悦びでもない歌を信じながら死んでいった一人の友を、ここで再び永遠に生かさねばならないのだとしたら……」のパートではなかったのか、と……

記念碑は建ったのか？ 記念碑は建たなかった。

死者のために建てる記念碑（「私」が「私」のこころのなかの死者を見つめて建てるパーソナルな記念碑）とはなんでしょう。記念碑を建てることは、そのはじめから必要なかったのではないか、わたしはそんなふうにも思いました。森田童子を好きだった女の子から教えてもらった歌（歌詞）をここに差し挟んでおきたいと思います（「たとえばぼくが死んだら」より）。

たとえば ぼくが死んだら
そっと忘れてほしい
淋しい時は ぼくの好きな
菜の花畑で泣いてくれ

3冊のノートと13枚の紙を使う必要はなかった、わずか4行で事足りるのではないか……

安部公房より4年ほどはやく生まれ、第二次世界大戦の悲劇を生き延びた（でも両親を強制収容所で失った）ドイツ系ユダヤ人の詩人パウル・ツェランは、このような喪失と別れについても巧みに表現します。たとえばこのように（飯吉光夫訳『パウル・ツェラン詩論集』静地社より）。

彼女を想う彼の愛ははなはだしく大きかったために、その愛は彼の柩を打ち破ることもできるほどだった。——彼女がこの柩の上に置いた一輪の花がそれほど重くなかったら。

別れを託した「一輪の花」を死者に捧げる…… 死者が死者のまま蘇ることがないように…… やがて、こころのなかの死者は静かに意識下（無意識の領域）へと沈んでゆき、「見えぬものに姿をかえて」わたしたちの〈生〉の大切

な部分とひとつになる……

(皆さまはどのように思われますか?)

記念碑は建ったのか? 記念碑は建たなかった。

『終りし道の標べに』作品は当初予定していたルートを外れ、瞬間々々の輝きに読者の眼をくらしながら飛行をつづけた。わたしはこの作品の成り立ちをそんなふう空想しています。それにしても、なぜそのようなことが起きたのでしょうか? (不思議だと思われませんか?)

それはたぶん……

そのとき時代が作家安部公房を選んだから(安部公房が実存を背景にして描こうとした人間と存在の世界は、時代が求めていたものだったから…)。安部公房が誰かの為になにかを成そうとしたとき、(亡き友のころを引き継ぎ物語世界を生きようとしたとき)、作品は当初の思惑=思考を越えてゆくかのよう遙か遠くまで飛びつづけた。その初フライトがデビュー作になった。わたしはそのように考えています。

このような読み方は、あまりにロマンチックでしょうか? そうかもしれませんね、書かれることのなかった「大地の歌」のように…… (だからといって、わたしはとくに気にしていませんけど…)

記念碑は建ったのか? 記念碑は建たなかった。

記念碑は建つことを夢見て、その夢から覚めないように、いまも永遠を生きている……

了

現実生活にあらわれる安部公房現象 3

「砂の女」 + 「密会」

メモ ～安部公房的混濁状化現象～

滝口健一郎

「砂の女」

昆虫採取にでかけた男は砂の穴のなかに閉じ込められやっきになって脱出を試みる

遂に外界に開放された男が見た風景…

「空は黄色くよごれていた。水から上がったように、手足がだるく、重かった。」

「口から、息を叩きおとすように、風が吹いていた。穴のふちをまわって、海の見えるところまで、登ってみる。海も黄色く、にごっていた。深呼吸を試みたが、ざらつくばかりで、予期していたほどの味はしなかった。」（「砂の女」より）

あれだけ希求し、自由の象徴のように思っていた外界は、男にとって↑このように無感動で虚ろな情景でしかなかった。

男は砂の穴のなかにふたたび回帰し、砂の穴のなかにこそ自分の居場所を認め、溜水装置の研究という希望に子供のように胸を躍らせる。

やがて砂の女との生活がふたたびはじまるのだろう…男にとって反日常空間だった砂の穴の生活は、やがて日常風景として見えだすのだろうか？

投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしょう。

編集部一同、ここからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

小説「砂の女」がわたしの住む日常と等価になってきたと感じてしまうのは、今わたしの居る状況が、主人公の男と同じ身の置き所のように感じるせいかもしれない。

リーマンショック以降、不況が訪れ、東京に生活していた失踪者たちは故郷をめざした。

わたしもそのひとりだった。

向かった先は失踪元（大阪）の実家。血縁の軋轢（母と姉家族との同居生活）渦巻く不本意ながらの居住空間＝閉塞空間での生活がはじまる。

実家＝砂の穴

わたしにはそう思えてならない。

穴のなかには女＝年老いた母が棲息していた。

目覚めてから眠るまで、在宅介護の生活がはじまる。

それは母との親密なる時間の連続～思いもおよばなかった濃い日常が積み重ねられていく…

男が砂の女から逃れられないように、わたしもまた母からは逃れられない。

母と二人三脚で生きていくという使命を背負ったかのようだ。

母の手足となり、買出しに出かけ、食事を作り、食べさせ、排便の介助をする…それら身のまわりの世話にいそしむ毎日。

当然、買い物（食材の買出し）に近くのスーパーに足を運ぶ。外出はそのくらい。砂の穴のような実家にとじこもる日々。男にとっての溜過装置の研究に匹敵するかのように思えるのはパソコンの存在だろうか。おかげで砂の穴（実家）から野外に出ることもまばらな日常を送っている。

閉塞空間での日々のなか…やがて母が「密会」に登場する溶骨症の少女に見えてきた…

無防備で傷つきやすい皮膚を持った無垢な存在

人間年老いると子供に戻っていくように思える…ひとりで生きていけない弱者＝母が愛くるしい少女のような存在に見えてくる…

毎日毎日繰り返される少女のような母との密会。

「もう誰からも咎められなくなったこの一人だけの密会にしがみつく。」
(小説「密会」より)

砂の女の実態は溶骨症の少女だった…安部作品に登場するふたりの女が混濁状を呈したダブルイメージでわたしに迫ってくる…わたしは限りなく誤読する安部ワールド的幻実世界に足を滑り込ませたのかもしれない。安部世界のあれやこれやの断片が磁力に吸い寄せられるように吸引され、新たなる安部公房的世界を再構築するようにさえ思えてくる…このような複数の事象が合体したかのように思える安部ワールド解釈を「安部公房的混濁状化現象」と名づけてみる。

砂の穴＝閉塞空間のなかには欠乏の意識が充満しているように感じるが、そのなかにオアシスのような存在の母が居る。今生活するこの空間は逃れようのない現実空間なのだ。

「砂の女」の要素のひとつをなす～外部に「世界」を求めるのではなく、今居るこの場所にこそ「世界」を求めなければならない～の方程式が全くのリアリティをもってわたしに迫ってくるように感じる。

で、コノことはわたし個人だけの問題ではなさそうだ。

東京時代の親しい友人も、リーマンショック以降、わたしと同じように実家に回帰し、欠乏と闘いながら高齢の親の世話をしながら生活している様子を電話で聞くと、小説「砂の女」のように、不本意ながらも砂の穴（わたしの場合は実家）のなかに棲息せざるを得なくなった失踪者のいかに多いかに思いをはせよう・・・「砂の女現象」にからめとられ、閉塞空間のなかで闘い、欠乏の意識のなかにこそ自由を獲得していく…世界のいろんな場所で「砂の女現象」が起こっているのではないだろうか…という密やかな妄想はいつの間にか確信にさえなっていき……

「やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」 (小説「密会」より)

今日も少女のような母との密会の時がはじまる……

ドナルド・キーン先生にお会いする

水島英己

[過日新潮社主催によるキーン先生の会が池袋のリブロで開かれました。編集部がご一緒した詩人水島英己さんが翌日Facebookにお書きになった記事の転載の許可を戴き、お届けするものです]

【春の宵 想はぬ人を想ひけり 荷風】

ドナルド・キーン先生の話をお聴きに出かけた。池袋のリブロで、「荷風句集」(岩波文庫・加藤郁乎編・2013年4月16日 第1刷発行)を買った。この上の8階でキーン先生の話がある。岩田さんと同じフロアの喫茶店で会う。二人で聴きに行こうと約束していたのだ。

新潮社の著作集担当者の方の司会。キーン先生が参加者から、あらかじめ出されている質問に答えていくというスタイルで50分ほどだったが素晴らしい話を聴くことができた。nhkのキーン先生特集のテレビ番組でも聴いたことがあるが、直接に先生の姿を目の前にして、同じような話でも聴くことができているというのは格別の思いがした。

中央公論の嶋中鵬二社長と永井荷風宅を訪ねたときの話をされた。これは、「一番好きな日本語何ですか」という質問から派生していった話だったと思う。「荷風さんの家に入ったときは、その汚さに喫驚した。しかし、荷風の日本語の美しさ、リズムあるそれに陶然とした。そして荷風のような日本語ができたら死んでもいい!と思った」というようなこと。2年間の日本での勉強を終えて、当時住んでいたイギリス(多分ケンブリッジ?先生はどこで教えていたなどと言う話は一切されない人だ)に帰るとき、たまたま空港で買った荷風の「すみだ川」を飛行機の中で読んで、感動して泣いたという話など。

この国の芸能から、古典文学、中世のそれ、近世のそれ、近代、戦後(安部公房・三島由紀夫なども含めて)文学のすべてに通暁している偉大な人間。しかし、もっとも小さな人々の哀歓にこそ、すべての文学の基本があるということを知り、誰よりも深く考えている人間(日記の研究を見よ)。

僕のようなものが、いくら讃辞を重ねてもと思うけれど、でも、こんな人、日本人で見たことがないよ。

キーン先生と握手した。その手は柔らかかった。先生、ご自愛下さい。啄木伝はゆっくりと書いて下さい、などと心で呟いたのだった。

キーン先生の一番好きな日本語の（音）の連なりは「徒然草」の文のそれ。キーン先生の一番好きな源氏物語の女性は「六条御息所」。

キーン先生の一番好きな「能」の曲目は「松風」と「野宮」。

「日本人」であるということだけで、それだから、「美しい国」などと、一体だれが言えるのか？キーン先生の少年のような笑顔が問いかけてくる。

[編集部記]

2013年5月3日（金曜日）、池袋リブロ、池袋コミュニティ・カレッジにて、16:00より、ドナルド・キーン先生の講演会があり、詩人水島英己さんと行って参りました。

日本文学と日本語を愛する気持ちが率直に伝わる、よいお話でありました。

話の終わったあと、著作集第2巻の『百代の過客』を入口のところで買い求め、サインの列に並びました。

もぐら通信のお言葉を戴いたことと、毎号お送りしてご負担にならないかを案じておりますと申し上げ、お読み下さっていることにお礼の言葉を申し上げました。毎号読んでいますと言われて、本当にうれしい心地がしました。有難いことです。キーン先生から名刺を頂き、また握手もして戴いて、幸せなことでした。

水島英己さんの最新詩集『楽府』は、アマゾンで買う事ができます：<http://goo.gl/YtIdt>

また、水島さんのブログ『詩人たちの島CHAPTER 2』もご覧下さい：<http://ban-chapter2.blogspot.jp>

5月19日『箱男』読書会レポート

清末浩平

5月19日（日曜日）、東京・新宿にて、安部公房の『箱男』の読書会に参加してきました。

この読書会は、ある読書家の方が個人で主催し、インターネットのSNSで参加者を募って開かれたものです。

私は主催者の方を存じ上げなかったのですが、「もぐら通信」編集部の岡田さんのおかげで、読書会の情報を知ることができました。知らない方たちの中に飛び込んでの読書会というのは、あまり経験がなかったのですが（今年3月の『燃えつきた地図』読書会のみ）、ぜひ参加したいという気持ちから、思い切って応募しました。

読書会当日。会場は、新宿の喫茶店の中にある会議室でした。コーヒーなどを飲みながら、まわりを気にせずゆったりと話ができます。集まったメンバーは、主催者の方を合わせて7名。SNSや他の読書会などで、すでに交流のある方々もいらっしやったようです。

まずは主催者の方が、自己紹介と読書会の趣旨説明をされました。——個人で読書会を主催なさるのは初めてとのこと。いろいろな意見を出しあうために、簡単に「答え」の出なさそうな謎の多い小説をあえて課題にしようということで、今回は『箱男』を選ばれたとのこと。

続いて、他の参加者が各自、簡単な自己紹介をしながら、普段の読書傾向、および『箱男』の感想も併せて述べてゆきました。

主催者の方がしっかりと段取りを用意されていて、それに沿って進めてくださったので、とてもスムーズに読書会が始まり、すべての方と初対面の私も、リラックスしてその場にいることができました。

メンバーは社会人が中心でしたが、大学生の方も参加されていて、年齢も身分も職種も多彩だったのではないかと思います。

共通するのは、みなさんたいへんな読書家だということです。一年に300冊以上の本を読まれるという主催者の方を筆頭に、普段からkindleを駆使して洋書を読

まれる方、一冊一冊をじっくりと精読される方……と、様々なタイプの読み手が集まっていました。

また、文学部以外の出身の方が大半でした。理系であったり、社会学や経営学であったり……。文学専攻でなくても、これほど多くの小説を読んでいらっしゃるのかと、正直なところ少し驚きましたが、しかし、これは驚いた私がおかしいわけです。文学部などとは関係なく、小説はあらゆる人に読まれるべきものだから。

安部公房に対する思いもそれぞれで、安部が大好きだという方はもちろんのこと、どうしても安部の小説は苦手だという方もいらっしゃいました。しかし興味深いことに、『砂の女』や『他人の顔』などは苦手だけれども、『箱男』はなぜか面白い、というふうにおっしゃるのです。私はそれを聞いて、なるほどと思いました。

『砂の女』や『他人の顔』においては、小説内で何かの出来事が起こると、それに対して主人公が理屈をつけ、むりやりにでも認識へと回収してゆきます。そのことによって、ストーリーの展開と、主人公の認識の発展とが並行します。主人公の認識は苦しい弁証法的過程をたどり、先の見えない内的葛藤が、ときにテキストの表面を埋め尽くします。そのような小説のあり方は、私にとっては非常に身につまされるものですが、しかし、理屈っぽく鬱陶しいと感じる読者もいるでしょう。

一方『箱男』においては、中盤以降、バラバラのエピソードが乱立し、イメージが先行する展開となります。なぜそうなるのか、ということについてはさておき、『箱男』後半は、内的葛藤（あるいは理屈）がテキスト上に占める割合が低くなるのです。そして、一般的な因果関係をたどって読み解くことがほぼ不可能になるので、かえってひとつひとつの鮮やかなイメージを自由に楽しめる、ということはいかにあります。

主催者の方の当初の狙いどおり、『箱男』はかなり分かりづらい小説であり、しかも、内へ内へともってゆくタイプの難解さではなく、外へ炸裂するタイプの、ほとんど爽快なまでの「わけの分からなさ」であるようです。読書会での議論も、細かい解釈を検討するというよりも、『箱男』の中の印象的なエピソードを出発点として、現代、都市、社会などについて自由に語り合う、という方向に進んでゆきました。

たとえば、箱男というアイディアはやはり、ホームレス（ダンボールで暮らす）とインターネット（「匿名性」）を連想させます。箱男的な状況は私たちにとって、自分と紙一重と言ってよいほど身近で、なまなましいものです。

また、参加メンバーの中には、『箱男』発表時にリアルタイムで読まれたという方がいらっしゃり、当時、学園祭で実際に箱をかぶって箱男になるというイベントもあったとか。そのような仕方でも楽しめる、活用したくなる、というのは、『箱男』ならではのことでしょう。

さて、読書会の話は、外へ外へと次第に広がってゆき、そのうち他の作家の名前、他の作品の名前が挙がり始めました。そうして会の終盤は、安部公房や『箱男』から離れて、広く小説の話をする時間になりました。これもまた、たいへん楽しい時間でした。

夕方6時すぎにいったん読書会は終わりましたが、そのうち何名かで食事に行き（そのお店も、主催者の方が予約してくださっていました）、そこでも当然、ずっと本の話です。なにしろ全員、小説が大好きなもので、初対面にもかかわらず、話の種は尽きません。その日に出た作家名を、思い出すままにいくつか挙げますと——アントニオ・タブッキ、フェルナンド・ペソア、ガルシア＝マルケス、フォークナー、莫言、オルハン・パムク、クツェー、川端康成、などなど。メンバーどうして「あの作品は最高ですよね！」と共感を表明しあったり、「これだけは読んでみてください！」ととっておきの一冊をお薦めしあったり、素晴らしい情報交換の場になりました。

最近、SNSの浸透のおかげか、空前の読書会ブームだそうです。私は、読書会への参加経験がこれまでほとんどありませんでしたが、こういった出会いと情報交換のチャンスは、とてもありがたいものだと感じています。今回、『箱男』をめぐる参加者のみなさんの意見を聞いて、私の中でも『箱男』という作品についての考えが広がり、深まりました。それについてはまたいずれ、何らかの形でぜひ書いてみたいです。

そして最後に、読書会的主催者の方に、改めまして感謝の言葉を述べさせていただきたいと思います。メンバーの募集、会場の手配、連絡、当日の進行など、主催者の方が大変な段取りをすべてこなしてくださったおかげで、楽しく参加することができました。本当にありがとうございました。

『人間そっくり』小論

wlallen

○お断り

「間違い」という差別的要素を含む言葉が、作品中に使用されているが、作品が書かれた時代背景と主題を考慮して、本論でも使用したことを予めご了承ください。

○感想

約15年前、私がまだ大学生だったころ、バイト先の休み時間に読んだのだが、そのときは「また、すごい作品に出会ったな」と思ったものだ。この作品のほとんどは、「こんにちは火星人」という火星人を題材にした、打ち切り間近のラジオ番組の脚本を書く構成作家と彼の家を訪問にきた自称火星人との会話で構成されている。SF映画に出てくるような、古典的ステレオタイプなたこ足の火星人のような我々とは異形の者なら、我々は無条件でそいつが火星人であることを認め、すぐさま友好または敵対行動をとるだろう。しかし、この男は地球人そっくり、いや人間そっくりで、そこがこの作品のみそになっている。我々とうり二つなわけで、それ故地球人と見なすのが自然で、それ以外の可能性はまず考えない。それでもなお、火星人と言い張るなら、そいつは間違いに違いない。実際、脚本家も間違いと思うが、その男は言葉巧みに脚本家の、そして我々の常識をも壊していく。

脚本家の厳しい追及にもかかわらず、彼が火星人でなく地球人であることを証明できないのだ。我々が常識とするところの一我々は地球に住む地球人であること一当たり前過ぎて言うのものはばかれるくらいの常識が実は本作品の冒頭に出てくる「公理」に過ぎないのではないかと疑わせる。火星に偶然に生物が存在し、偶然に地球人並の高等生物で、偶然にも地球人とうり二つかもしれない。偶然を仮定すれば、その可能性は否定しきれない。自称火星人の言うところのトポロジー的論理だ。

会話を進めていく内に、脚本家は知らず知らずのうちに自称火星人のペースにはまっていき、ラストの不気味な結末へと辿り着く。彼は、自分の置かれた状況をわかりかねるまま途方に暮れてしまうのだ。自分がどこにいるのかわからない、相手は何者かわからない、迷子の感覚のまま終わっている。最後に彼は読者に、何が真実なのか問いかける。「ここは、寓話の実話に負けた世界なのか、それとも実話が寓話に負けた世界なのか。」

脚本家の考える実話の世界、自分が地球人で、自称火星人は地球人の気違い（自称火星人の言葉を借りれば、「火星病」にかかった地球人）という認識。それに対して自称火星人の言うような、自称火星人は本当に火星人で、自分は「地球病」にかかった火星人とする寓話。そのどちらが勝ったのだろうか？自分の考えていた実話が寓話で、自称火星人の寓話が実話なのかもしれない。いや、どちらでもいいのかもしれない。脚本家を真に不安にさせるものは、「そのどちらか判別つかないこと」、「結論がでないという結論」、「実話と寓話が入り交じって分離できない」という不確定性なのだ。

○公理について

公理とは、数学用語で、論理を進める上での前提条件となるものであり、そこから定理等が導かれる。しかし、その性質上証明できないものである。一例として、ユークリッド幾何学では、公理の一つとして「同一平面上で、直線外の一点を通して、この直線に平行な直線は、ただ一つだけ引ける」というものがある。しかし、一つも引けない、或いは複数引けるという公理を立てることも可能で、それらは非ユークリッド幾何学と呼ばれる。

私の興味として、20世紀初頭に繰り広げられた、数学基礎論の三派の論争がある。ヒルベルトの形式主義、ブラウアーの直観主義、ラッセルの論理主義の各陣営が、数学の礎を巡って争った激しい論争である。結局、ゲーデルの不完全性定理によって、どの陣営が正しいとも言えないという結論に達したと言う。なお、ラッセルの異端の門下生に、『論理哲学論考』を著したウィトゲンシュタインがいる。

また、数学基礎論の専門家、林晋先生のサイト「公理主義、形式主義、証明論、構造主義」

<http://www.shayashi.jp/HistoryOfFOM/Axiomatik/axiomatism.html>

で知ったが、安部公房が『異端者の告発』において、「公理主義」という言葉を使っている。林先生の解説では、形式主義(formalism)の和訳であろうとのこと。しかし、安部がどのようにして、公理主義と言う言葉を知ったか、興味深いと述べておられる。推察として、高木貞治の『数学雑談』を挙げておられる。

○関連作品情報

本作品の8年前の1958年に短編「使者」が発表され、また1959年にテレビド

ラマ「人間そっくり」が発表、放映されている。

「使者」（安部公房全集009所収）

「人間そっくり」の原型となった作品。こちらでは、いきなり、「秘めたる使命をおびてきた・・・」という「使者の詩」が出てくる。設定は、脚本家ではなく、講演会場の控え室で出番を待つ講師奈良順平に自称火星人が現れる話になっている。結末は、「人間そっくり」のような不気味なものと異なり、ドタバタ劇風に終わっている。

テレビドラマ「人間そっくり」（安部公房全集009所収）

「使者」の1年後に、その名もずばり「人間そっくり」というテレビドラマが放映されている。内容は、作品に行き詰まり、締め切りに追われている小説家、加島洋介の家に、頭のいかれた男とその妻がやってくるという設定で、小説版にかなり近い。しかし、小説家と彼の妻の間で他愛のない会話が交わされたりして、全体的に小説版ほどの悲壮感はない。書けない状態をそのまま、書こうとしたりして、なかなか面白い。

テレビドラマであり、火星での生活シーンも入っており、どのように映像化されたのか知りたいところだ。そして、なにより気を引くのが、小説家に金子信雄、男に田中邦衛という、豪華な配役だったことである。なんとか、ビデオ化して欲しいものだ。

戯曲「人間そっくり」

移動も少なく、会話が魅力の「人間そっくり」なので、戯曲化されてないのが不思議と思っていた。しかし、全集009の作品ノートによると、1962年に、テレビ台本を元にして劇団・人間座が上演しているそうだ。また、1964年に老川比呂志が一幕物に脚色して劇団・青俳で上演している。

○最後に

本作品は、『SFマガジン』に3回にわたり連載された作品であり、本文中にも「SFM」という雑誌が登場する。SFを「動物園の檻」から解放した傑作で、エンターテインメントとしても文句のない一品である。何度も何度も同じところを鳴らし続ける壊れたレコードのように、執拗に同じところを回り続けるくどい会話劇を是非堪能してほしい。

[w1allen, <http://www.geocities.co.jp/Bookend/2459/novel.htm>]

興味尽きない公房さんのエピソード

—『週刊新潮』で安部ねりさんが披露—

hirokd267

去る5月16日付『週刊新潮』に、「安部公房没後20年 一人娘が語る父の奇矯な悪戯」が特別読物として掲載されていました。ここには多くの安部公房さんのエピソードが語られていたのですが、読んでいて私も共時的な想いが湧き出てくるのを禁じ得ませんでした。週刊誌の常として時が経つとこれらのエピソードも消えていきそうなので、ここに思いつくまま書き留めておきたいと思います。

○ねりさんが中学生の頃、睡眠学習を施そうと睡眠中にカセットデッキを仕掛けた。

→これは1967～69年頃になるのでしょうか。まだオープンリールで、それまでのソニーのレコーダーはノブのスイッチだったが、新型のナショナルはピアノタッチの鍵盤式ボタンで、押すと確かにガッチャンと大きな音を立てた。私はそれを担いで地方の小学校へ授業データを集めに通っていたものだ。睡眠学習は1958、9年頃、ソ連の科学者の研究成果としてその効果が新聞に報じられていた。トピック扱いではあったが。

○小学一年生の頃、雑誌の付録を自分で作ってしまう。

→教育者としては失格ですね。父親としても。やりたかったらもう一冊買いなさい！って。今なら「大人の科学」とかあって、公房さんはテルミンとかシンセサイザーとかプラネタリウムとか、夢中になってやりそうだ。

○『鉄腕アトム』のストーリーを先取りしてしまう。

→プロだから当たって当たり前？手塚治虫とのコラボがあり得たかも。

○「王様のアイデア」商品がお気に入り。

→なつかしい。私もよく通った。なんと平成19年に全店閉店してしまっているではないか。

○左ハンドルの車で支払い用にマジックハンドを使っていた。
→支払うところを見ている者は笑ってしまうやつね。

○「人間は努力をしたらいけない。工夫せよ」と言った。
→これは発明の原点だよ。私が子どものころ発明しようと夢想したクモの糸の衣服がつい最近合成されて量産できるようになったというニュースが。よく言われるが、夢を持ち続けることも大切と。

○NECのワープロの開発に協力した。
→これも使用経験あり。最初期に使っていたのはシャープだったが、大きな机よりまだ大きく200万円以上した。

○作品を書き終える直前に、いつもすべて破棄してから書き直していた。
→プロの凄さ。これは知りませんでした。改訂をくり返すのもこれができるからかも知れませんね。

○真知さんは夜食に色とりどりのおかずをいっぱい作り、仕事場に運んでいた。
→もちろん献身的ですが、願わくば自分でも楽しんでいたことを。

○数学の宿題を考えても解けず「僕が解けないんだから解かなくていいんだ」と言った。
→そういうわけにはいきません！

○作品の感想を真知さんを通して聞いてきた。
→ねりさん向けのお話しも作ってあげればよかったのに。そしたら今の日本の子供たちがどれだけ恩恵を受けたことか。また感想を聞くほど、ねりさんの読解能力を信じていたのかしら。

○ねりさんを7歳で死んだ妹の洋子さんに重ね合わせていた。
→以前から私はそれを仮説していた。洋子さんはとても頭が良かったという。ねりさんは自分のことだから書いていないけれども、ねりさんもとても利発な子であったに違いない。重ね合わせるのは自然でしょう。また私の今の関心は、公房が洋子さんに捧げたような作品はないだろうか、というこ

と。『密会』の溶骨症の少女は、公房が意識していたかどうかにかかわらず、その可能性を感じさせる「愛」を備えている。他にもあるかも知れない。

○ねりさんに男の家庭教師が付きそうになった時、猛反対した。

○ねりさんの交際相手を自宅に連れて行ったら、くそみそに言った。

→ふつうの男親の反応ですね。自分を相対化できていない、って言うておきましょう。

○ねりさんが医学部に進む時（春光さんにも）社会が変化してもこれで食べていけるぞ、と言った。

→終戦後、さんざ苦労したから、実感が伴っていますね。

○箱根の別荘近くのゴルフ場を双眼鏡で観察して毒づいていた。

→その様子がかえっておもしろい。見事にひとしいけれど、自分は箱男で見られていないつもり。

○絵本作家と居酒屋に入った時、靴下と足の間に盗聴器を仕込んでいた。

→絵本作家ってT氏でしょうか。盗聴器は正直、趣味悪いと。

○死の状況—小さな脳出血から退院後、ホテルからヨドバシカメラに行き、インフルエンザに罹って倒れ、救急搬送されながら亡くなった。

→この無理がなかったらノーベル賞が。

○大江健三郎は「安部さんの文学には詩人の心とともに、科学者の心があった」と言った。

→後輩の大江さんはいつも安部公房の理解者。絶交していた時も。それは片想いに似る。

○ねりさんの三人目の子供を亡くなる前日に会わせた。「何だ、これは」と言った。

→死ぬ前の人間は半ば別人。私も親から「誰？」と言われた。

○98年にノーベル文学賞の選考委員から「亡くなっていなければ受賞して

いた」と言われた。

○同席した詩人は、ノーベル・アカデミーの食堂には公房の写真が掲げられている、と言った。

安部ねりさんの伝える公房さんのエピソードはまだまだありそうだ。またの機会を作ってほしい。安部公房ファンは公房さんのこんなお話しに飢えています。



私の本棚より

[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『郷土誌あさひかわ』（1993年7月安部公房追悼号）

wlallen

今年3月に、「郷土誌あさひかわ」を発行している「あさひかわ社」を編集部一同で訪問し、渡辺三子さんにお会いしましたが、なんだか初めて会う気がしませんでした。渡辺さんがとてもフレンドリーに接してくださったこともありましたが、約10年前から電話で何度もお話していたのが大きいのでしょう。安部公房さんについて、貴重なエピソードを聞かせてもらえたのが、とてもうれしかったです。

きっかけは、私が運営するホームページ「安部公房解読工房」の掲示板で、安部公房全集の刊行に協力されたM.Kさんから、「郷土誌あさひかわ」の存在を教えてもらったことです。それを見て、追悼号が読みたくなり、「あさひかわ社」に電話すると、渡辺さんが出られました。残念ながら、反響が大きいため、現物は送れないので、旭川市中央図書館に相談してくださいとのこと。その後、ありがたいことに、「郷土誌あさひかわ」を毎号贈呈してもらっています。そればかりか、執筆も三回させていただきました。

さて、前置きが長くなってしまいました。追悼号は、図書館で複写したものを郵送してもらいました。井村春光さんの「次々と奇妙な事を考えつく人でしたが、自分で汗を流すことは大嫌いで、他人にさせて成果は自分のものにする特技は見あげたものでした」という爆笑エッセイ。三浦綾子さんによる、歌会での安部よりみさんのエピソード。居酒屋「大舟」の社長馬場昭さんのじゃがバターを安部公房さんが大層好まれたエピソード。また、最後に安部公房さんの死顔が写されています。

この原稿を書くために、改めて読み返すと、とても貴重な資料であることを再確認しました。特に、「蓄音機」（『笑う月』所収）に出てくる、祖父にいたず

らをする従兄、飯沢英彰さんによるエッセイがあったことを見落としてました。今回読むと、安部公房さんと非常に仲の良い従兄弟だったのだなと思いました。

入手方法は、この号以外はまず「あさひかわ社」にお問い合わせください。この号と「あさひかわ社」にない分は旭川市中央図書館や国立国会図書館を利用して下さい。

『思想の不良たち』（上野俊哉著。岩波書店、2013年）

清末浩平

たとえば「顔貌性」という言葉から、『他人の顔』を想起する。あるいは「逃走線」という言葉から『砂の女』を、「生成変化」という言葉から「デンドロカカリヤ」などの〈変形譚〉を。……現代思想の代表的な哲学者ジル・ドゥルーズが、精神科医フェリックス・ガタリとともに書いた『千のプラトー』は、安部公房の読者にとって、わくわくするような連想を与えてくれる書物ではないでしょうか。

『思想の不良たち』（岩波書店、2013年）という本は、こういった連想の楽しみを利用して、脚光を浴びる機会の比較的少ない作家たちの思想を「日本語環境」の外へ開こうという、「比較思想史」の試みです。著者の上野俊哉さんは、鶴見俊輔、花田清輝、きだみのるといった戦後日本の作家らと、ドゥルーズをはじめとする同時代の西洋現代思想との間に、互いに通じあうような概念を見出してゆくのですが、日本側のラインナップの中に安部公房も登場し、その思想の普遍性や現代性が次々に指摘されます。

安部は独特の理論を持って思考を展開した作家でしたが、彼の思想はいまだ、十分に検証され位置づけられているとはいえません。ですから、このような作業によって議論の風通しを良くすることは、とても有意義なことだと思われます。

しかし、安部の小説の読者としては、この本の内容を鵜呑みにできないこともまた事実です。

上野さんはたとえば『箱男』から、おそらくジャック・ラカンのなく空虚な主体を類推し、固有の実存（「かけがえのなさ」）を放棄した新しい人間像の可能性を読み取ろうとします。ですが、先入観を斥けて『箱男』を仔細に読めば、箱男であることは望ましいことではなく、箱男的な状況（存在の抽象化）に人間は耐えられない、というふうに書かれていることは明らかです。上野さんは、現にある状況に対する安部の批評・批判を、安部の抱いたあるべき世界像だと思い

込んでいるのです。こういった混同が起こったのは、上野さんがあまりに軽快に安部から概念を拾いあげ、あまりに軽快にラカンへと繋げてしまったからではないでしょうか。

上野さんは安部に対して、何らかの固定観念を持っているようです。その固定した概念の配置図は、いわゆる現代思想をも折り込んだ、見通しの良い平面ではあります。しかし、安部の小説は、認識の発展とともに概念の含みを変化させてゆくダイナミックなものですから、一枚の平面図に固定しようとする、解釈に無理が生じるのです。実際、上野さんの『終りし道の標べに』論も『他人の顔』論も、いくつもの誤読のせいで、残念ながら小説自体からは乖離したものになってしまっているようです。

安部の真価を見極めるために必要なのは、キャッチフレーズをちりばめて地図を彩ることはありません。小説の進み行きにつきあって歩き、そこで起こる変化を体感することです。ドゥルーズなりラカンなりとの本当の共鳴は、その後にこそ見つかるでしょう。ちなみに私は、冒頭に挙げたドゥルーズの諸概念と安部公房のモチーフとは、字面の印象ほどにはじつは似ておらず、単線的には繋げられないと考えています。だからこそ、ドゥルーズはユニークな哲学者であり、また、安部はユニークな小説家だといえるのです。

『思想の不良たち』は、とても野心的な仕事です。鶴見俊輔に関しても花田清輝に関してもきだみのるに関しても、私はこの本から多くのことを新しく学びましたし、読んでいる間、小さからぬ知的興奮も味わいました。こういった試みは、そろそろ為されねばならなかったものですし、また今後、より多く為されるべきものでしょう。しかし、こと安部公房に関しては、やや勇み足に終わってしまったかも知れません。

新刊書評：木村陽子『安部公房とはだれか』2013/5/15 笠間書院刊

岡田裕志

本書の惹句には「文学革命の旗手・公房は今日の想像をはるかに超えて「マルチな男」だったのである——小説のみならず、演劇、映画、ラジオドラマ、テレビドラマまで自ら手掛けた、メディア・アートの先駆者、安部公房。その多彩な表現活動を分析しつつ、生涯を俯瞰する、安部公房入門書。」とある。

それでやさしい入門書かと思ってページを開くと、最初に「安部公房図表・解説」という5折りの横長な折り込みが開いてくる。「解説」は「夜の会」とか「世紀」とかのごく普通のものだが、「図表」は1946年から1980年にかけての年表形式でグラフ化されていて、たとえば「現在の会」や「記録芸術の会」の時期が一目でわかるようになっている。小説・映画・演劇・ドラマなどのジャンルでの活動時期も一覧できるととても便利な図表である。

これは手が掛かっているな、と思って今度は後ろから開いて、著者略歴を見ると早稲田大学大学院博士課程修了とある。研究者なのだ。そして人名・件名の「索引」が8ページもあり、この本がただの入門書でないことがはっきりした。さらにさかのぼって「主要参考文献」は10ページあることを確認。この文献は私の知らないものが多数あるので、本書の内容が専門的であることを表している。

そこで第一部「安部公房とはなにものか」に入ると、第一章は小説『砂の女』の説明もそこそこに、リテラリー・アダプテーションと筆者が呼ぶ、文学を核とした多分野の表現活動に説明が及ぶ。これは「一風変わった小説家」というだけの安部のイメージを、小説に限定されない多方面の表現者としての安部にシフトさせようとする本書の意図を表している。

第二章ではその視点に基づいて演劇についての活動を詳しく述べる。ここは安部ファンにとっても十分読み応えのある質と量を備えている。

第二部「作品論への誘い」では映画シナリオから『壁あつき部屋』、戯曲から『どれい狩り』、小説から『砂の女』を取り上げて、作品論を展開していく。読みやすいものとはなっているが、もともと博士論文からの一般向け改訂であるというから、内容はかなり深い。

こうして本書を読んで、安部のイメージが変わるかどうかは、やはり読者のファン度にもよるから、まずは読んでみるしかない。読み応えがあることは確かである。

そして本書を一言で表せば、入門書とは銘打っても実は「羊の皮を被った狼」ですよ、と。

『砂の女』

岩田英哉

多分、日本には、わたしが持っているこの一冊しかないだろうという本を一冊、わたしは持っています。日本にある筈がありません。何故なら、それは、わたしが東ドイツに住んでいたときに買った本だからです。

それが、この本です。



その本の名前は、『砂の女』。ドイツ語の訳が、『Die Frau in den Duenen』（ディ・フラオ・イン・デン・デューネン）。東ドイツの出版社、Volk und Welt、日本語に訳すと、民衆と世界、あるいは民族と世界、あるいは国民と世界と幾たりにも訳せる名前の出版社から出版されています。この名前そのものが、既に古色蒼然たる感じがします。

翻訳者は、Oscar BenlとMieko Osaki。

小説の始まる直前のライセンスの明示に関するページをみますと、当時の西ドイツのRowoltという出版社で1967年に出版したものを、印刷だけ、ライセンスを供与されて、東ドイツのこの出版社で印刷をして販売したことがわかります。

当時の東ドイツマルクで、11.8マルク。貨幣価値のない東ドイツのマルクですから、ほとんどタダといってもよい値段ではあります。今の感覚だと、200円でしょうか。

いや、冒頭、日本に一冊といいましたが、安部公房の手には届いていたかも知れません。そうであれば、日本に2冊のうちの一冊ということになります。



安部公房の空間と時間（2）

OKADA HIROSHI

安部公房の思想の基礎として、弁証法的思考があるのを見てきた。それは初めは対話＝内話の方法として、「否定→反否定→統合」という原義的な弁証法であった。そして後に三法則を含んだ唯物弁証法の、「対立物の統一」概念に進んでいく。

そのような基礎の上に、安部公房においては、様々な表現形態と思想の流れがあるのだが、この文学の方法としての「表現形態」とその基になる「思想」とは正しく弁別されなければならない。従来この区別がおろそかにされ、また混同されてきた。もちろん安部公房の場合において、いかなる「表現形態」も「思想」の変遷も、彼の弁証法的思考がその基にある以上、どれも必然性を帯びている。この点もなおざりにされてきた問題である。以下、時系列に沿って述べて行く。

表現形態と思想

〈実存主義〉は思想であるが、問題は文学との接続である。前に見たように、18歳から安部公房は形而上学を否定し、「問題下降」（＝没落・ニーチェ）の方法により「存在」と「自己」の谷間へ弁証法的な思索を深めていった。そして両者の狭間にハイデggerの「現存在」の概念が架橋された時、「世界内＝在」と「世界＝内在」が弁証法的に統合され、「人間の在り方として純粋な世界内在となる」観点に到達した。安部公房の実存主義は、これらから構築されている全体であって、その推進力は彼自身の持つ実存的な生命である。こういう実存主義の全体は一般に言われる実存主義とはかなり異なっていることがわかるだろう。また「現存在」が「存在者」に対して創造的に働くことから、実存主義と創造活動は彼にとって一体のものであった。

〈シュルレアリスム〉は表現形態である。そこにそれ自体の思想性を読み取っては混乱の元になる。先の実存主義によって文学的創造をなすとき、現実の再構成はその重要な基礎である。そして存在、物自体の側からその旧来の社会的な絆を一度断ち切る方法が「夜の会」を通じて花田清輝等から吸収したシュルレアリスムの方法であった。またそれは存在についてのリルケ体験以来の無名からの出発とあいまって、緊密な内容の作品となって表れた。「壁－S・カルマ氏の犯罪」はその象徴的作品である。さらに「バベルの塔の狸」はシュルレアリスムの傑作となっている。

〈アヴァンギャルド〉は表現の態度である。これも思想性をここに読み取るべきではない。前衛というが、それは元の意味を離れて、前を向くだけでなく、主要な戦線は現実の後ろの敵である。そのために社会的な攻撃性・破壊性を備えている。例えば「異端者の告発」にそれは見られる。

〈マルクス主義〉は思想であるが、安部公房においてはマルクス主義のどの思想を受容したのかは慎重に検討しなければならない。たとえばマルクス主義の基礎的文献である『資本論』ほかの経済論を読んだり学んだりした形跡はない。もしあるのならば、のちに述べる「空間の微分としての時間」からの「固有な時間の発見」が、『資本論』第一部第一篇第一章「商品」における分析と、まったく同じ弁証法によっていることを、どこかで述べているはずだと思うが、見られない。それに対して安部のマルクス主義への資料の言及は、スターリン「マルクス主義における言語の問題」など、レーニン、毛沢東、そしてマルクスらの言語論や文学論にほぼ限られている。そしてマルクス主義者としての安部は同志を獲得するオルグ活動、下丸子文化集団での文学指導とオルグなど、実行的な面で力を発揮していることが強調されるべきである。

安部がマルクス主義に向かったのは、実存主義では捉えきれず表しきれない社会的矛盾に直面したからであり、それは弁証法的思考をしてきた安部にとって必然的な過程であったと私は考えている。

〈ルポルタージュ〉これは表現のジャンルであり方法である。マルクス主義による社会矛盾の把握と表現は、上からの抽象的・論理的な上部構造論から発するのではなく、下部構造の具体的かつ分析的/総合的（弁証法的）把握自体が表現を産み、作品となるのは、これまでの安部の思考から当然の方向であった。「黄金道路」（1962/04 全集16）はその金字塔である。

[途中ですが、続きは次号に回させていただきます。]



安部公房の変形能力7：リルケ4

～詩人から小説家へ、否、詩人のまま小説家へ～

岩田英哉

今まで3回にわたって、主にリルケの書いた詩と散文をそのままお伝えしながら、リルケがどのような詩人であるのかを理解して戴こうと思いました。

そうすると、どうしても次に、安部公房が詩文から散文（小説）に向かうにあたって、リルケとの関係をどのように考えたか、その関係をどのようにしようとしたのか、そうしてどうやって（見かけ上であれ）詩人から小説家になったのか、安部公房自身の言葉に即して、それを考察する必要があります。

榎木恭介との対談、「詩人には義務教育が必要である」（全集第8巻、187ページ）に、次のような箇所があります。1958年1月1日の対談です。安部公房、34歳。無名詩集の出版（1947年）から、11年が経っています。

「榎木 ……ところで、あれは戦後一、二年たった頃だったと思うが、きみの「無名詩集」という詩集をもらったことがあった。いまでももっているがね。ガリ版刷りで、リルケ風な詩だ。しかし、詩人・安部公房から、小説家・安部公房へのプロセスというようなものは考えられないね。リルケやカフカはきみのなかで詩あるいは小説の極限状況として興味があったのだろう。

安部 おかしなものをひっぱりだしてきたな。あの頃は猫をパチンコで捕ろうとしてた。」

この対話を読みますと、榎木恭介は、安部公房が詩人から小説家になった過程に「プロセスというようなものは考えられない」、即ちプロセスはないといい、従って、詩人の安部公房と小説家の安部公房は全く断絶したものだと考えていることがわかります。

とはいえ、人間の考えと行いには首尾一貫性が自然に求められますから、批評家としては、詩文の代表としてはリルケの名前をいい、小説家の代表としてはカフ

カの名前を挙げて、このふたつの文藝のジャンルを、安部公房のそれぞれの文学形式の「極限状況として」の「興味」という言葉によって、ひとつにまとめようとしているのがわかります。

他方、『無名詩集』に言及された安部公房は、肯定も否定もせずに、その問いには直接答えずに、「おかしなものをひっぱりだしてきたな。」とはぐら返して言い、続けて、「あの頃は猫をパチンコで捕ろうとしてた。」と答えています。

これは、安部公房の韜晦でしょうか。いや、やはり安部公房は、芸術家として嘘をつくことができません。

「あの頃は猫をパチンコで捕ろうとしてた。」という言葉を読んで、わたしが直ぐ連想するのは、子供がパチンコで小鳥を狙う様子ですが（わたしもやったことがあります）、木の上に止まっている小鳥をパチンコで狙うということから、安部公房の脳裏には、このとき、『不思議の国のアリス』の木の枝の上にいる Cheshire Cat、チェシー猫、あの段々と姿が消えて行って最後にその笑いだけが枝の上に残るチェシー猫の姿が一瞬よぎったに違いありません。

そうして、自ら公言している所ですが、芥川賞を受賞した『壁』所収の一連の作品が、ルイス・キャロルの影響（影響とは何でしょうか？）で書かれたものだという事、改めて思いだしたことでしよう。

「あの頃は猫をパチンコで捕ろうとしてた。」という言い方で、詩人とはまた別に、小説家になるためには、小説家の小説を書くための方法があるということ、安部公房は言っているのです。

それは、どのような方法だったのでしょうか。

安部公房のエッセイに、『牧神の笛』（全集第2巻、199ページ）という題のエッセイがあります。1949年1月に書かれたエッセイです。安部公房、25歳。『無名詩集』の出版から2年後です。

このエッセイを読むと、遅くともこのときには、安部公房はリルケの詩文の世界を脱して（本当にそれが出来たかが、これから論ぜられることなのですが）、小

説という散文の世界の中に入ろうという安部公房の意思を明瞭に見てとることができます。

さて、安部公房は、それをどのように成し遂げようとしたのでしょうか。

結論から言いますと、安部公房はリルケを否定しませんでした。批判はしましたが、いつもの安部公房の思考の通りに、対象を受容して、受容したままで、全く別の視点を導入することで対象を変形させ、それを自分の思考の一部として取り入れて活かし、そうして次の段階へと進んだことがわかります。この限りにおいて、リルケという詩人は、生涯、安部公房の心の中に棲んでいたということになります。

このエッセイの冒頭の最初の段落を以下に引用して、話を続けます。安部公房は次のようにこのエッセイを書き始めるのです。

「リルケが小さなもの、ささやかなものを歌ったということは、むろん、ただそれだけの表現ではつくされぬ、恐ろしい、ある不快な苦々しいものさえ持つていはしまいか。そこには冷たい、というようりは残酷なといったほうがよいほどのものが感じられてならない。美とか純粋とか、ガラスのような貼り札がリルケをとりまくのも、おそらく同じ理由でこんなによそよそしく不似合いなのだろう。せいぜい、その残酷さを、なるべく人目につかぬ顔の裏がわにでもかくしておこうとする心づかい……。いや、そういうことさえぼくには苦々しい。心づかいなどではなかったにちがいない。もっともっと残酷な、非情な行為が、すでに人間的な感性を絶していたことの、ちょっとした言いかえにすぎないのだ。ひょっとすると彼は、ただフォーン（筆者註：牧神のこと）のようにわがままなねがいばかりを生きていたのだと考えられはしまいか。」

この文章を読むと、安部公房がリルケの持つ冷酷な、酷薄な、実に残酷な、非人間的な面を持つ人間だということに気付いたことがわかります。

このとき、安部公房は、大人になったのではないのでしょうか。わたしは、そう思います。

10代に、あれほど耽溺して読み耽ったリルケ。そのように愛した作品群を創造

した当の詩人が、そのような人非人の人間でもあったということを知っての驚き。その苦々しさ。

安部公房は、この感情を、「ぼくのいきどおり」と言い表しています。怒りと憎しみの感情です。そして、続けて、「考えてみると、ぼくには今だに許すというだけのゆとりがないように思われる。」と書いています。

そうして、更に読み進めると、安部公房はリルケからこそ実存を学んだことがわかります。リルケから学んだ実存の概念です。そして、それも「結局実存は人間にどんな解決も与えなかった。」と書いています。リルケの世界は、安部公房がこのとき考えていることの解決にならなかったというのです。

ここまですら読むと、安部公房は、リルケから学んだ実存という概念によって、人間の問題に解決が与えられると、それまで考えていたことがわかります。それは、10代の、親しい友人達に対する書簡を読んでも、その通りです。リルケという詩人、そしてその実存に基づいて独自に概念化した詩人の理想の姿は、『詩と詩人（意識と無意識）』（全集第1巻、104ページ）にまとめたように、安部公房の典型的な人間像でありました（このとき安部公房20歳）。

しかし、そのように愛したリルケの非人間性に気付いた25歳の安部公房は、このエッセイの中で、リルケという芸術家の非人間性に対して、そのような人間の創造した世界に耽溺していた自分自身に対して、憎しみと怒りを感じるのです。

この感情と論理の整理整頓をしようとして、リルケから教わった小さきものを中心にしてその問題の解決を凶ろうとしたのが、この『牧神の笛』というエッセイなのです。

安部公房はリルケに裏切られたとでも思ったのでしょうか。答えは否です。ここを切り抜ける手口は、冒頭述べましたように、実に安部公房らしいものがあります。次に引用します。

「だからリルケが、日常性としてはものの日常を体験しながら、単に言葉として人間の日常を日常と呼んでいたのだとすれば、その小さなものは明らかに小さなものであり、小ささとははっきり区別されてくる。リルケが歌ったのはあくまで

も小さなものであり、すでに運命から解き放たれた非人間的なものであり、その世界には小ささなどまるでなかったにちがいないのだ。……悲しむものはいたが、悲しみはなかった。愛するものはいたが愛はなかった。したがってそのものは日常に支えられた人間ではなかった。」

これは、詩人から小説家（散文家）に転ずるに当たっての、安部公房のリルケ理解の核心です。

わたしは、この考え方を読んで、18歳のときに成城高校の校友誌に書いた安部公房の論文、『問題下降に依る肯定の批判』を思わずにはいられませんでした。この論文でも、安部公房は、同じように、その幾何数学的な能力から、都市の外部にある遊歩場が都市の中へと物理的に連続して接続して出来ているのではなく、大きさも幅も高さも無い抽象的な概念として直接都市の内部に接続している、そのような交易の場所を考えておりました。19歳の『僕は今こうやって』は、更に一步を進めて、その内部と外部を交換するという思考に境地を開拓しております。そして、20歳の『詩と詩人（意識と無意識）』では、それを次元変換（『無名詩集』では轉身と呼ばれている）という概念にまで、内部と外部の交換を高めて、呼んでいるわけです。

さて、上のリルケ批判の後のリルケ理解は、その後の安部公房のリルケ理解として生き続けました。安部公房48歳のときのエッセイに『リルケ』と題したエッセイがあります（全集第21巻、436ページ）。1967年。安部公房、43歳。

安部公房は、六本木のあるレストランで、一緒にいた友人に、同じ店に女狂いのリルケの息子がいると言われたエピソードから話を始めます。そうして、次のように書いています。少し長いのですが、引用します。

「ぼくの処女作『終りし道の標べに』に、リルケの影響はまったく見られない。その後につづく、未完の長篇(?)『名もなき夜のために』で、多少影響をのぞかせはするが、それもすぐに消えて、『壁』や『デンドロカカリヤ』など、一連のシュールリアリスティックな作風に進んでしまう。……

あれは戦争中のことだった。『形象詩集』や、『マルテの手記』……あのガラス

細工のようなリルケの世界は、ぼくにとって、まさにかげがえのないものだったのである。戦争のなかで生まれ育ったぼくらの世代は、戦争の哲学しか知らされなかった。反戦などという言葉は、耳にしたことさえなかった。しかしぼくは、なぜかその戦争の哲学になじめなかった。世界を拒み、世界から拒まれているような怖れのなかで、リルケの世界は、すばらしい冬眠の巣のように思われたのである。ぼくはリルケの世界、とりわけ『形象詩集』と『マルテの手記』に耽溺した。銃をかつぎ、雨やほこりの中を、行軍演習しながらも、同時にぼくは、あの洗いたての敷布のような、ひんやりとしたリルケの言葉にくるまり、別の世界を感じつつけていられたのである。

あの耽溺感を、今なら分析できる。リルケの世界は、時間の停止だったのである。停止というよりも、遮断といったほうが、もっと正確かもしれない。リルケはほとんど時間をうたわない。彼の眼には、純粋な空間しか映らないかのようだ。彼にとって、存在とは、ものの形のことだったらしいのだ。だが、これは矛盾している。純粋空間が、形体だなどというのは、おそろしく幼稚な誤解である。しかし、誤解であろうと、なかろうと、耽溺出来さえすれば、ぼくにはそれで充分だったのだ。実際に時間を遮断してしまえば、それは肉体の死だ。ニセの時間遮断で、死んだような気持ちになれば、それで充分だったのである。」

安部公房が、「彼にとって、存在とは、ものの形のことだったらしいのだ。だが、これは矛盾している。純粋空間が、形体だなどというのは、おそろしく幼稚な誤解である。」と言っているところが、『牧神の笛』でのリルケ批判、リルケ理解であることは、お解りでしょう。

小さいものではなく、この『リルケ』というエッセイでは文字にはなっていませんが、小ささという抽象概念に着目して、リルケの思想を殺したり捨てたりせずに、自分の内側のものとしたまま、もうひとつ高次の抽象的な世界を構築しようとする安部公房のころは、この43歳のときも生きていると考えることができます。

このように考えた上で、『牧神の笛』というエッセイでは、「リルケを超えるなどということはまるで無意味なのだ。はじめから超えられるべきものなどにひとつ持ってはいなかった。」と結論するのです。更に、このエッセイからの引用を続けます。

「そうだとすると、マルテの手記が書かれた意味も、ぼくにはすっかり納得がゆくのだ。ほとんどその発端に見ることを学びはじめると書いたマルテが、すぐその後で書いている顔のエピソード……、ノートル・ダム・デ・シャン街の角、体を折って顔を両手の中に埋め想い沈んでいる貧しい女、そっとしておいてやればよい考えが浮かぶかもしれぬと足音をしのばせるのだが、静かすぎる町は彼の足から足音をうばい、大きくひびかせ、女は驚いて不意に顔を上げる。あまり急激だったので、顔面がその手のくぼみに残ってしまう、恐ろしい顔の裏面、顔面のなくなった顔……、それがマルテの見ることだったのだ。もしかするとリルケの世界では内部と外部とがすっかりいれちがいであったのかもしれない。たとえば、内容にとりかこまれて、内がわに外気を入れるガラス玉の気泡のように。そこでは恐らく内部が客体となり、ぼくらは内部をものとして共有し、外部を主体にゆずってしまう。あるいはその反対のように……、ぼくにはもうそんな具合にしか考えられないのだ。人間的なものはすべて裏がえった顔であり、それに合わせて自己を裏がえそうとする試みだけが詩ではないだろうか。」

「人間的なものはすべて裏がえった顔」だという考えは、普通のひととは反対の考えです。これは如何にも安部公房らしい。自己の顔を裏返す試みが詩であるならば、しかし『他人の顔』という散文の作品があるように、安部公房の小説もまた詩であるということになるでしょう。確かに安部公房の小説の多くは、詩文というべき譬喩（ひゆ）を多く含んでおります。

話が前後しますが、上に引用した『リルケ』というエッセイで、

「ぼくの処女作『終りし道の標べに』に、リルケの影響はまったく見られない。その後につづく、未完の長篇（？）『名もなき夜のために』で、多少影響をのぞかせはするが、それもすぐに消えて、『壁』や『デンドロカカリヤ』など、一連のシュールリアリスティックな作風に進んでしまう。」

とあるように、安部公房は、やはり詩文から散文へ、詩から小説へという変遷を思うときに、柁木恭介との対談でもそうでしたが、ルイス・キャロルを思い、またシュールレアリスムを思うのです。それほど、『デンドロカカリヤ』や『壁』所収の諸作品は、安部公房にとって、詩文から散文へ移行する転機となり、成功した作品であったのでしょ

それでは、安部公房にとって、詩文とは異なる、明瞭な散文の本質とは何であったのでしょうか。

『散文精神—安部公房氏』と題した朝日新聞掲載の談話記事があります（全集第28巻、300ページ）。この談話の最後に、次のような文章があります。

「つづけて「散文以外には置き換えられないものの典型」として、安部氏の挙げたのが、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』である。

「思想は全くないし、イメージが豊富だからといって映画にしたら子供のものになってしまう。つまり散文なんだ」

また、同じ談話の少し前のところで、安部公房はこう言っています。

「散文は韻文と違って、定型や韻律をもたない論理的な文章である。そのために、凝縮や集中や絶対化ではなく、解除や拡散や相対化の方へ向かう。簡単にいえば、＜批判性＞と＜散文性＞は紙一重というより、ほとんど同義語といえるだろう。」

このとき安部公房、62歳。

上の発言は、このころ盛んに考えていた言語と国家の関係を前提にして言われているものです。この発言から見る限り、安部公房の考えている散文性とは、批判性ということになるでしょう。

詩文には確かに政治的な批判性はありません。しかし、『不思議の国のアリス』を引き合いに出して言おうとしている安部公房の散文についての考え方は、もっと含みがあるように思います。

その含みをあぶり出すために、再度『リルケ』というエッセイに戻り、最後の方にある次の文章を読んでみましょう。上で引用した『リルケ』からの引用に直ぐ続いている段落です。

「やがて、苦痛の時代が過ぎ去り、ぼくもこわごわ、リルケ式冬眠の穴から、這

い出すことにした。そしてぼくは、いやでも発見させられてしまうのだ。時間が、流れ、たしかに存在していること……

そして、ぼくはリルケと別れる。『形象詩集』の作者の息子の女狂いを聞き、詩人自身も、多分そうだったに違いないと想像して、笑いこけたりする。かと言って、べつに、後悔はしていない。リルケはぼくに、精神の自殺術を教えてくれた。おかげでぼくの肉体を、無事、生きながらえさせることが出来たのかもしれないのだ。それに、リルケの世界は、あくまでも世界であって、文学ではなかった。ぼくに文学的な影響を与えたのは、むしろポーである。リルケはぼくに、精神の死を体験させてくれた。その、死人の眼でものを見る術から、シュールリアリズムまでは、比較的近い道のりだった。その意味では、『終りし道の標べに』も、リルケと無縁だったとは言えないかもしれない。あれは、まだ文学ではなく、長い巣ごもりから這い出したばかりの、単なる独白にすぎなかったのだから。はじめて見る、時間の激流に眼を見張り、思わずはいた感嘆の吐息にすぎなかったのだから。」

ここで安部公房が文学と言っているのは、明らかに小説や戯曲の世界を言っていて、ポーの名前を出しています。ポーから学んだことは、既にこの連載の最初で論じたように、仮説設定の文学です。これを安部公房は明瞭に意識しています。

この言い方では、詩は文学ではないのかということ、そうではなく、安部公房にとっての詩はあくまでもリルケの詩であり、それを世界と呼びかえて（文学ではなく）、リルケを救い、自分自身がリルケの非人間性に感じた怒りと憎しみの感情を救っております。

こうして見ますと、リルケとの対比において知られる散文性というものは、実に微妙な感じがあります。本当は、安部公房のころの中では、詩文と散文の根っこは、明解に分ける事ができていないのです。何故ならば、確かに安部公房も正直に言っているように、そうして実際その通りなのですが、「リルケはぼくに、精神の死を体験させてくれた。その、死人の眼でものを見る術から、シュールリアリズムまでは、比較的近い道のりだった。」からです。

そうして、やはり安部公房は何歳になっても、10代から晩年まで変わらずに、詩文と散文の根っこ、『第一の手紙～第四の手紙』の言い方を借りれば「詩以

前」の場所とこと、その筆法を借りれば散文以前の場所とこと、即ち言葉以前の場所とこと、更に即ち安部公房のいう実存から言葉を発する芸術家だったからです。安部公房の散文に詩文の引用がたびたびあるのは、読者のご存じの通りです。

『牧神の笛』を書いた同じ年の3ヶ月後の4月に、詩人大島栄三郎宛の書簡で、安部公房は次のように書いています（全集第2巻、255ページ）。

「それから、残念なことに、ぼくも亦「詩人」であることを告白させていただきます。やはり詩から出発したのです。近頃は小説に縛り上げられて、ほとんど詩も書けませんが、まだ詩を捨ててはをりません。恐らく捨てることはないでしょう。」

この書簡からは、「残念なことに」という逆説的表現、詩人という言葉に括弧をしてあることなど、詩への距離が心理的に生まれていることを看取することができます。

『牧神の笛』を書いてリルケ批判をしてもなお、安部公房の心には、心情的に詩から離れることの躊躇があったということ、同時に小説を書く事への不安のあったことが、この手紙でわかります。

『S・カルマ氏の犯罪』まで、あと2年。

散文と詩文の明確な相違は、前者の一文は一意的であるのに対して、後者の一文は多義的であるということ（複数のコンテクストを含んでいるということ）にあります。

確かに『壁』の小説群は、この意味での散文性を備えた作品でした。『不思議の国のアリス』がそうであるように、言語によってしか散文的に表現できない表現、他の映画などのメディアでは表現できない散文的な、一意的な言語表現。しかし、安部公房が詩人であることをやめたかどうか、これは『牧神の笛』の示す通りです。

小ささを考えるときに、安部公房は幾何数学的な、小説を構造化する散文家であ

り、小さいものを考えるときには、安部公房はリルケと同じ純粹空間の詩人である。

安部公房は、『牧神の笛』の最後を次の言葉で締めくくっています。

「結局、ぼくのいきどおりも、その凍りはて裏がえったフォーンの快活さにたいしてであり、それは同時に、ほかでもないぼく自身の足どり、ぼくの血を吸おうと待ちかまえるぼく自身へのいきどおりにほかならなかつたのではなからうか。ぼくもまた、フォーンの笛を吹かねばならぬのだ。」

詩から、いや詩からではなく、リルケの詩の「世界」から離れようとして、自分自身にとって本質的なことを言おうとすると、どうしても言葉が詩的になる、多義的な一行を書かずにはいられない詩人安部公房が、いるのです。

牧神の笛を吹く。この最後の一行を、あなたはどのように解釈するでしょうか。



もぐら感覚 11 : 自走するベッド

タクランケ

自走するベッドは、勿論最晩年の作品『カンガルー・ノート』に出て来ます。

しかし、この自走するベッドの初出が、『終りし道の標べに』だということ、あなたは驚くでしょうか。

『カンガルー・ノート』は、安部公房67歳のときの作品。『終りし道の標べに』は、24歳の作品。その時間差は、43年。

前回のかいわれ大根の形象（イメージ）もそうでしたが（初出から34年間）、今回の自走するベッドも、それを上回る歳月を掛けて（初出から43年間）、安部公房はその形象（イメージ）を抱懐し、大切に育て、醸成して、最晩年に小説にしたということになります。

『終りし道の標べに』に、次の箇所があります（全集第1巻、298ページ上段）。当該個所の前後も含めて引用します。

「「後で饅頭を持ってきて呉れないか。そうだな、二時間程して……え、何、決まった事さ、二人前だよ」

陳はほっと息をついて煙草を取り出し、のろのろ大義そうに詰め始める。部屋はふたたび取り残されたようにひっそりする。まるで手に触れられる物体の様に、頬に、唇に、目に感じる静けさだった。

丁度手術台上に載せられて、長い廊下を右へ左へと引き廻された後、ふと一切の時間が絶切れたように車が止り、突如固定した静寂の中に投出される、そんな気持ちだった。（棒線筆者）不安は何時の間にか消えてしまって、後には長い、無限に引延ばされた時間がじっと待っている。私はすっかり落ち着いてしまった。そして直感的に陳から何かを引出すのなら今だと感じたのだ。

陳は丁度マッチをすろうとしている。数秒の間には落着を取り戻して終わらる。私は決心して口早にいった。

「陳、今日の鴨打は李と一緒にだったのかい？」

「丁度手術台に載せられて、長い廊下を右へ左へと引き廻された後、ふと一切の時間が絶切れたように車が止り、突如固定した静寂の中に投出される、そんな気持ちだった」という気持ちが、そのまま『カンガルー・ノート』の主人公の気持ちでもあります。

この気持ちは何を意味しているのでしょうか。

この気持ちを喚起するには、『終りし道の標べに』の場合のように、ベッドが自走する前に、「部屋はふたたび取り残されたようにひっそりする。まるで手に触れられる物体の様に、頬に、唇に、目に感じる静けさ」というような静けさと空間が必要なのです。

安部公房は『カンガルー・ノート』の初めの方で、移動の前の静かな空間を、43年後に、次のように書いています。

「変な手術室だ。タイルはおろか仕上げのモルタルも塗っていない、コンクリート打ちっぱなしの車庫みたいな空間。おまけに高めの石段にして二段分低く、壁の一方が鉄の巻き込み式シャッターで、どこにも窓がない。明かりは天井の大きすぎる蛍光灯だけ、車庫でなければ、拷問室の感じだ。しかし、ベッドだけは本格的である。がっちりとした鉄製で、厚いマットの両脇には、転落防止用の柵がつき、全体がアイボリー仕上げで、枕元には何か操作のスイッチ類が並んでいる。皮膚泌尿科目になると、手術も特殊な設備が必要なのもしれない。」

『終りし道の標べに』の伝で行くと、この後自走するベッドの到着する空間は、どれも「無限に引延ばされた時間がじっと待っている」そのような空間ということになるでしょう。

そして、一つの空間から次の空間へと移動するためにベッドがある。ベッドは、空間と空間を接続する役割を果たしている。と同時に、安部公房好みの、ベッドは閉鎖空間であり、閉鎖空間であるためには、患者はベッドに縛りつけられていなければならない。

ひとつの空間も、次の空間も、静寂の空間だということが大事なことだと、わたしは思います。そうして、上の引用の「長い、無限に引延ばされた時間がじっと待っている」ような、そのような時間とは、空間化された時間、即ち空間の言いだと思います。時間の空間化は、安部公房の生涯を通じての試みでした。

この静寂の空間は、言うまでもなく、安部公房がリルケから学んだ純粹空間、時間の無い空間です。

安部公房という芸術家は、見かけ上、いろいろに変貌しているように論じられますが、根底においては、この静寂の純粹な空間に対する憧憬が常にあったと、わたしは思います。

この憧憬が、「そんな気持ち」の正体です。

『ドゥイーノの悲歌』の天使が、空間から空間を無時間で飛翔するように、『終りし道の標べに』の主人公も、いや、『カンガルー・ノート』の主人公も、無時間で一つの空間から次の空間へ移動するのです。「長い、無限に引延ばされた時間がじっと待っている」とは、ほとんど無時間と言い換えてもよいでしょう。ベッドの中の時間は、本来無時間なのです。安部公房は、どうもそう考えているようです。

そうしてみると、そのようにベッドの空間に横たわっているとは、既にして死者としてそこにいるということなのかもしれません。

話が飛ぶ様ですが、『密会』でも、ベッドで搬送されるのは、殺された警備主任でありました。

さて、1982年頃から、安部公房は文壇づきあいも避け、箱根の仕事場に籠もり切りになりますが、これも晩年のリルケによく似ております。リルケも晩年にはスイスのミュゾットという村の古い館に一人孤独に棲んで、詩作を行い、最晩年の大作ふたつ、『ドゥイーノの悲歌』と『オルフェウスへのソネット』を同時に完成させたのでした。

表立ってリルケという言葉で出て参りませんが、1982年ころから、安部公房は10代に耽溺したリルケの世界に回帰して行ったのだと、わたしは思っております。それが証拠に、遺稿『飛ぶ男』の世界は、誠に静寂感、静謐感が漂っております。時間の無い空間の世界という感じが頻りにします。この先の小説をもっと書いてもらいたかったと惜しまれます。

さて、『カンガルー・ノート』に出て来る、そのような無時間を保証するアトラス社製のベッドとはどのようなものなのか。Googleで (Atlas, hospital bed) で検索すると、本当にアトラス社製のベッドがありましたので、その写真を掲載致します。



『カンガルー・ノート』の主人公は、このようなベッドに乗って運ばれた。

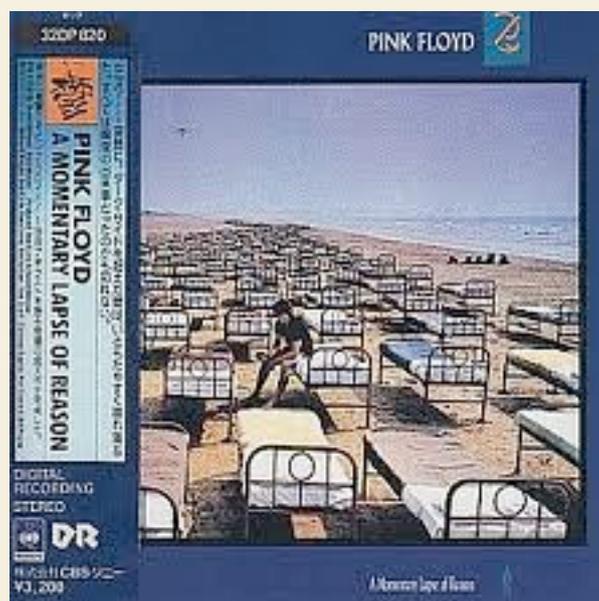
余計な詮索ではありますが、安部公房は、多分自分の入院経験で、これを知ったのではないのでしょうか。

また、『終りし道の標べに』との関係で『カンガルー・ノート』をみると、前者の主人公は阿片で、後者の主人公は麻酔薬で、それぞれ意識が朦朧としていて、夢とうつつの識別がし難い状態に設定されているということが挙げられます。

そのような状態で、覚醒と睡り、意識と無意識の間を往来しながら、空間を

ベッドに乗って移動するということになります。

安部公房の好きなピンク・フロイドの名前と『鬱』という日本名のアルバムの名前が作中、「緑面の詩人」の章の中に出て来ます。例によって、Googleの画像検索をしますと、次の様な、このアルバムのジャケットの写真が出て参ります。ベッドがいっぱい浜辺に置かれている写真です。Googleがなければ、安部公房の隠した仕掛けというところでしょうか。



英語の原題は、A Momentary Lapse Of Reasonというようです。

そうして、YouTubeで、その演奏を聴く事ができます。

<http://www.youtube.com/watch?v=hInblnV00t4>

「波のうねりがしだいに幅を狭めてきた。船だろうか？櫓を漕ぐひそかなきしみ、船縁をつたく水の音。まるっきりピンク・フロイドの『鬱』の出だしとそっくりじゃないか。バンド内の紛争でロジャー・ウォーターズが抜けた後、

87年に製作された新グループによる作品だ」とある、その出だしをお聞き下さい。

この出だしを聞きますと、確かに音楽ですから音は鳴っているのですが、その背後にあるのは、無音の沈黙、静寂の音という音を感じます。

あなたは、この音楽をどのようにお聞きになるでしょうか。

次回のもぐら感覚は、ひとさらいです。このひとさらいという言葉を書いてみると、『カンガルー・ノート』も、『密会』のように、ひとさらいの小説なのだと、改めて思います。



Rhonus tempor placerat.

「安部公房と東鷹栖」 3

～村史などからみる東鷹栖との関わり～

東鷹栖安部公房の会会長 森田庄一

1 鷹栖村史（大正3年5月20日発行）

付録の列伝に父方の祖父・安部勝三郎が記載されています。原文は漢字カタカナ表記で旧文体です。原文の雰囲気を残しつつ現在の言葉風に改めて紹介します。

安部 勝三郎 君 近文3線18号（注：現在の東鷹栖3線18号）

君は香川県の出身にして、嘉永6年（1853年）9月2日、山田郡前田村大字西前田に生まれる。家は代々、農業をし200年以上の旧家であり、祖先中に何人も村役人となったものもいた。宗教は真宗本願寺派なり。

君は明治15年1月16日、綾歌郡福家村字福家安部氏の長女・タケ子に配婚す。養父は孫三郎で30年6月30日に本村1線16号に於いて没す。養母はキクで大正2年76歳に達し、なおかくしゃくたり。

君には1男5女あり。長男・浅吉は上川中学校に在学中なり。長女・しなは養婿・久四郎を迎え、2女・わさは11線23号の田中氏に嫁ぎ、3女・やえ、4女・えい、5女・すえは幼くして死亡した。孫が1男3女あり。

君は幼時の寺子屋時代に松井常治に就き修学し、後に農業に従事する。故郷はその手腕を発揮する地にはあらず。北海道は知人先輩が既に移住して着々と成功しているのを耳にした。我もまた渡航して子孫百年の大計を開こうと明治27年3月3日に心を奮い立たせ意を決して家族6人と共に郷里を出発、本道に航し、小樽に上陸、札幌に出て、元道庁第2部勤務の鈴木某に寄り、本村2線11号に一時滞在、後に1線16号の松平農場に入りて小作人となり、辛酸を嘗めること7星霜（注：7年）、この間、儉約励精し貯蓄する所の資を以て、8線15号に於いて未開地5町歩（注：1町は3,000坪で9,900平方メートル）を鈴木某より200円にて、8線12号に於いて2町5反歩（注：1反は300坪で990平方メートル）を那須仁右衛門より160円にて、8線12号の成功地1戸分を500円に、8線17号未開地5町歩を兜谷徳平より150円に、3線18号1戸分を山城元平より500円に、4線17号2町5反歩を佐々木三右衛門より1,000円にて買い求め、全部これを畑地に成墾し、目下は水田20有余町造成し、更に愛別町に於いて約15町歩の水田を購入し、今や本村の大地主の1人に数えられ、家門繁栄、資産豊富、ようやくその素願を達するに至った。

公職は、組長たること八ヶ年、学務委員、土功組合議員、同修繕工事委員、学校建設委員、第七師団移転歓迎委員、寄送委員等に就任、今や第三部長、学

務委員、村会議員等に推薦された。

この他公共慈善の業に貢献すること熱誠にして、日露の役のときに国庫債券の募集に応募すること3回、学校に寺院に寄付斡旋すること枚挙にいとまがない。

君は生来、堅忍不拔、精励事に当たり質実産を治め、よく衆庶の模範となる。また極めて記憶力に富み、よく談しよく語る。

2 東鷹栖村史（昭和30年3月25日発行）

- (1) 第二編 鷹栖村の草創期 1 移民の渡来 (2) 個人移住の草分け
祖父・安部勝三郎が記載されています。

～略～

個人移住の最も早かったのは、(明治)25年中に来住した三浦市太郎、26年中の杉山清輔(茨城)、紺野忠治郎(宮城)、三浦定吉(同)、東森浅吉(徳島)、近藤要蔵(同)、吉田与三松(富山)、吉田栄蔵(同)、辻野小四郎(石川)、27年中の板倉才助(千葉)、山田一清(山梨)、中川宗一郎(富山)、山下甚蔵(同)、中家外次郎(同)、長谷川庄四郎(山形)、窪田清作(石川)、津木貞治郎(和歌山)、安部勝三郎(香川)、筒井亀太郎(同)、梶本利喜蔵(徳島)、藪内宇助(同)等で

これらの人々は戸長役場創設以前の草分け移住者であった。

- (2) 第七編 戦争及びその後の村勢 10開村50年記念式と開基60周年記念式

昭和16年の開村50年記念式典において安部勝三郎と母方の祖父・井村亀蔵は開拓自治功労者として表彰されています。

また、安部勝三郎は各種団体功労者のうち産業組合部門でも表彰されています。

- (3) 附表(六) 東鷹栖村理事者公職者一覧

祖父・安部勝三郎、井村亀蔵が記載されています。

議会議員 明治45年6月6日選挙(1級 半数改選)

山城幸次郎 本谷英雄 森松甚蔵 安部勝三郎 佐野実
五十嵐善四郎

大正4年6月6日選挙(1級)

真対富三郎 板倉才助 山田一清 安部勝三郎 本谷喜太郎
山城幸次郎 森松甚蔵 窪田市松

～略～

大正13年8月30、31日選挙

井村亀蔵外15名

(4) 附表の(十) 東鷹栖村民名簿 (昭和30年1月1日現在)

母・安部ヨリミが掲載されています。

9区の一

世帯主氏名・安部ヨリミ 出生地・北海道 入村の年・昭和21年 職業・農業

3 北海道発達史 (明治44年11月16日発行)

安部 勝三郎 氏

郷里 香川県綾歌郡福家村字13塚38戸
現住地 上川郡鷹栖村3線18号

本道拓殖界小作より挺身して成功した人はすこぶる多いといえども、安部氏の如き大成功を博し得た人は知らない。安部氏は如何にしてこの如き大成功を得たるか、氏の敏腕と氏の計画としかしてこれに伴う堅忍力行の偉大なりしに依る。

氏は嘉永6年9月2日郷里に生まれる。先老孫太郎氏明治30年6月30日鷹栖村1線16号に於いて逝去。母・キクは健全で75歳に達する。

～以下途中は鷹栖村史とほぼ同じなので省略～

日露戦役には国庫債券3回の募集に応じて奉公の誠を示したる等、氏の如きはまさにこれ誠実の権化と言うべき也。

4 鷹栖邨墾田碑 (大正2年8月建立)

この碑は大雪土地改良区(東鷹栖4条5丁目)の敷地内にあります。近文土功組合(大雪土地改良区の前身)が巨額を投じて石狩川の豊富な水源を利用してかんがい溝を開墾し、それによって稲作及び造田事業に一大飛躍をもたらせたことを記念して大正3年に建碑されました。

祖父・安部勝三郎は近文土功組合の議員として、碑陰(碑の裏側)に名前が刻まれています。ちなみに表側の碑文の書丹(刻んである字の下書き)は当時の書の大家であった西川春洞です。どういう経緯で春洞に依頼したかは不明です。

5 官報第1960号 (大正8年2月17日)

母・安部ヨリミ(旧姓井村ヨリミ)の東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)・文科への入学許可が掲載されています。

読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。
メール配信担当:岡篤史(w1allen)

池田龍雄様より

「もぐら通信」有難うございました。「もぐら通信」でわたしの知らない（むろん、全部を知っているわけではないのだから当然ですが）安部公房の姿が改めて見えてくるので、面白く読んでいます。

桐原正二様より

岡 篤史様

もぐら通信（第8号）受け取りました。
ありがとうございました。

今月も安部公房にまつわるニュースがありましたね。

このところ安部公房の名前をネットや新聞で見かける事がちよくちよくあって、なんだかうれしい気持ちになります。きつともぐら通信の読者も増えて、編集や発送・発信の作業もさぞ大変なんだろうなあとと思います。

そして、そのおかげで毎月安部公房についての新しい情報や論文などに触れることができる事に、心から感謝します！

桐原正二

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

また、次の方々からご感想・お励ましを戴きました。有り難うございました。
(要約させていただきました)

内藤由直先生から

「毎号、いろんなコンテンツが充実していき興味がつきません。中でも、wlallenさんの『方舟さくら丸』論は、自分も卒業論文で取り上げた作品でしたので面白く拝読しました。今後もますますの充実を期待しております。」とのお言葉を戴きました。有り難うございました。

巽孝之先生から Takayuki TATSUMI @t2tatsumi

「安部公房愛読者の雑誌『もぐら通信』第8号到着。昨今の再評価は間違いなく同誌の充実と関わる。今号も作中のかいわれ大根から作家自身が旭川の居酒屋大舟でおかわりしたジャガイモの話まで飛び出し度肝を抜く。OKADA HIROSHIの新連載も入魂。」とのtwitterでのご発言がありました。本誌を高く評価していただき、有り難く、感激しました。

清末浩平様から

「毎回のことですが、作品論だけでなく、安部公房を直接ご存知の方の回想や、訪問記も読むことができ、とても贅沢な雑誌だと思います。どの記事も興味深く読ませていただきましたが、なかでもやはり、「弁証法」の話題が一致した岡田様の記事には、刺激をいただきました。」

「安部公房の作品は、読めば読むほど深みが増すように感じられますし、また、安部の思想や安部の周辺の人物、運動、事件などもまだまだ知らないことばかりで、もっと読みたい、もっと知りたいという気持ちがつのる一方です。」とのことです。ありがとうございました。

森田庄一様から

「8号の出版にあたり、早速にもお送りいただき厚くお礼申し上げます。掲載させて頂いた資料が「東鷹栖安部公房の会」発足の基となりました。まだ、目

立った活動もしていませんが先日、朗読会に関しての助言を頂き、戯曲「友達」の朗読を検討しています。本当にありがとう御座いました。」こちらこそありがとうございました。

このほか次の方々からメッセージなどを頂戴しました。まことに有り難うございました。

しめじ様 ホッタタカシ様 花谷紫月様



Maecenas pulvinar sagittis enim.

【合評会】

第8号の合評会を5月10日から、ヤフーtextream「安部公房」トピで開催しました。

<http://textream.yahoo.co.jp/message/1000004/0bit8xkbc?page=1&sort=d&feel=99>

第9号の合評会も同様に行いますので、読者の参加をお待ちしています。

また、掲示板の移転を検討中です。移転する場合は、移転先をtextreamにて告知します。

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、大江健三郎様、辻井喬様、宮西忠正様、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様、新潮社様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解読工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/357854486.html>



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

某日、昨日の根回しが効いて朝7時に今日の休みが決定。すぐ東京行きの準備。京橋の画廊での池田龍雄さんの個展を目指す。池田さんには会えなかったが、個展を観て、感想を書いて託す。作品集も購入。後日池田さんから礼状をいただいて感激した。

「他者への通路を開く」ことはむつかしく考えないで、スマートに実行できれば素晴らしい。そんなふうのできる人に憧れる。今、自分はその恩恵を享けている側。大事を成すには、賢者より大愚の人の力が勝るだろう。愚に徹して行きたい。

満月近い月を夜半に観る。同じ月を観ている人がいるはず。その共時性もお互い知らねば知らぬまま。

旭川でお会いした三浦光世さんの朝日での記事を拝見する。綾子さんとの愛の透徹した高さに感動。

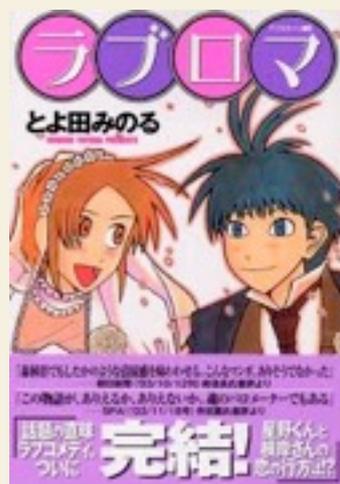
[OKADA HIROSHI]



今回はマンガの話をしてします。10年くらい前に、講談社の雑誌「アフタヌーン」で連載されていた「ラブロマ」（作者：とよ田みのる）を最近読破しました。直球ラブコメマンガで、主人公星野君の言動がストレート過ぎて、面白いです。「みかん」（星野君が使うSEXの隠語）を実際にするのが、連載当時はショックでしたね。普通のラブコメマンガだと、そこら辺をぼかして、いきなり、数年後結婚して、子供が出来ましたみたいな展開を見せることが多いです。それに対して、本作は「みかん」の話題から逃げなかったことで、作者の力量が伺えるなと思いました。

とよ田みのる先生は、現在小学館のゲッサンで「タケヲちゃん物怪録」を連載中だそうです。私は未読ですが、機会があれば読んでみたいと思います。

[wlallen]



実に余りにも遅いadaptationであります。最近携帯電話からスマートフォンに変えました。使ってみて、実に利用価値の高いのに驚きました。Kindleなどあつというまにダウンロードできて、アメリカのアマゾンの本が、その場で即座に読み始めることができる。世界時計もついていて、タヒチとかエディンバラとかモロッコとかイスタンブールとか、わたしの好きな場所を表示させて、眺めては楽しんでいます。この世界時計で気付いたのですが、エディンバラとモロッコは経度が全く同じで、日本からの時差も同じなのかという発見もありました。ニュースも読めるし、YouTubeなども視聴できるので、これは凄いいという感じが頻りです。欠点は、電池の消費が実に速いこと。これは、まだ商品としては未完成だと、わたしは思っています。とはいえ、一度手にすると離すことができないでしょう。安部公房が生きていてスマートフォンを手にしたら、何と云うか、どんなエッセイ、どんな小説を書くでしょうか。スマートフォンを新しいメディア（媒体）ととらえて、きっと何かをやったに違いないと思うのです。[タ克蘭ケ]



編集後記

Every dog has his day. 誰の人生にもいいときがある。

中学生のときに買った、小さなポケット版の英語と日本語比較の英語格言集に、この格言がありました。これを、わたしは折に触れて思い出すのです。

わたしの人生にmy dayと呼ぶに値するdayがあっただろうかと、そうして、振り返り、思うのです。

もしわたしの人生のそのようなdayがあるのだとしたら、こうして今文章を書き、毎月出しているもぐら通信にこそ、my dayがあるのではないかと思います。Every mole has his day.

わたしも安部公房と同じ本籍は北海道で、生まれも育ちも北海道の釧路という、荒くれの気風の港町なのですが、気象が内地と全く異なり、東京に初めて18歳の初春に、羽田空港のタラップを降りると、雨が降っていて、それが細かい糸をひくような、そうして決して風が無く、真っ直ぐと天から降って来る雨で、ああ、これが教科書に書いてあった古典でいう春雨なのかと、本当に驚いたことがあります。全く別天地に来た思いでした。今思うと、梅雨の時機に入ったころだと思います。

今日この原稿を書いている5月29日は、気象庁によれば梅雨入りとのことで、また内地らしい、繊細な季節が始まるようです。北海道では、紫陽花はからっと乾燥した夏に咲くのです。

今号も素晴らしいご寄稿を戴きました。ご寄稿戴きましたみなさんに、感謝申し上げます。

次号には、あなたのご寄稿をお待ちしております。どんな一行でも結構です。ご連絡下さい。[タクランケ]

安部公房の広場

連絡先: eiya.iwata@gmail.com

差出人:

安部公房の広場

〒182-0003 東京都調布市若葉町
「閉ざされた無限」

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. ピンク・フロイド他：ホッタタカシ
2. 安部公房の空間と時間（3）：OKADA HIROSHI
3. 『飢餓同盟』小論：wlallen
4. もぐら感覚12：ひとさらい：タクランケ
5. 安部公房の変形能力8：変形とは何か：岩田英哉
6. その他のご寄稿